

RWBYOC ☒XUXA☒

ニベオカシンヤス

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

※『RWBY』の派生オリジナルキャラクター、通称「RWBYOC」の小説です。

ミストラル王国に名を轟かす「ハンター」養成校「ヘイヴン・アカデミー」。

そこには「最悪の」新入生がいた。

キセラ・バルサミカ：嘘つき。

ユナカイト・アバグネイル：ペテン師。

星火（シンフォ）・ジャスパール：奇術師。

アマレット・D・K：詐欺師。

この4人からなる、当代随一の問題児チーム、「XUXA（シューシャ）」。

それは、瞬間的に最も有名になり、  
そしてハイヴン・アカデミー史上  
最も早く解散したチームの名前ある。

# 目次

e p. 5	K. "	e p. 4	c a "	e p. 2	n a l e "	e p. 2	e r "	e p. 1
"X U X A "	 X U X " A "	"A m a r e t t o	 X " U X A 	X " e r a B a r s a m i	 X " U " X A 	U " n a k i t e A b a g	 X U " X " A 	X " i n g h u o J a s p
150	99	D.	58		19		1	

## ep. l "Xinghuo Jasper" | XU

"X"  
"A"  
|

「大抵の子供は、へウソをついてはいけない」と教わって育つ。君の所もそうだったんじゃないか？ だがぼくの家はいささか変わっていてねー」

すると少年はおもむろに歩を進めた。外は波もないのか、甲板は殆ど揺れていない。

舞台役者のようにしつかりと、やや過剰なほどに抑揚のついた、そしてよく通る声で  
 独白しつつ、

「ぼくの父が言うには、へウソをつくなら、純粹に自分のことだけを考えてつけだそう  
 だ。ひどい話だと思わないか？ ふつう、そういう流れならへ誰かを想ってつくウソな  
 ら許される」とか、何か綺麗な方向でまとめそうなものじゃあないか」

少年はなおもゆつくりと歩き続ける。

「しかしぼくはこの父の言葉を大層気に入っててね。行動指針にしているくらいなのさ。何故かわかるかい？」

両腕は彼の頭——にかぶった大きな帽子のつばくらいの高さに掲げられ、白い手袋をはめた両手は手のひらを晒している。

少年の視線の先——どう見ても穏やかとは言えない、武装した男たちに向かって。

「おい止まれ坊主！ 変な真似しやがったら人質を殺すって言ってるだろうが！」

片目に三本、爪で引つ搔かれたような傷跡の残る男は、そう怒鳴りながら手にした銃を人質の頭に突きつける。片腕で人質の少女の頸を締め上げると、少女は小さくうめき声を上げた。

「おいおい、かわいそうなことをするもんじゃあないぜ。今からぼくが替わりに人質になりに行こうって言ってるんだから」

「何言ってる。お前は人間だろうが。俺らはへけだものどもを世の中から追い出すためにやってんだ。ガキは帰って寝てろ」

「……『ガキは帰って寝てろ』なんて本当に言われる日が来るとは思わなかったよ」

少年の片脛が不快そうにひくついた。

呻く人質の少女の頭の横から生えた、巨大な狐のような耳が、力なくうなだれた。

〈けだもの〉——〈ファウナス〉。この世界に人間とともに共存する知的生命体。ヒトによく似た姿を持ちながら、身体の一部に、動物や虫など、人間以外の生物の特徴を宿した種族である。ヒトと異なる姿を持つから、あるいは、ヒトより優れた能力を持つから、ヒトは彼らを恐れ迫害してきた。表面上はその歴史は終わったとされているが、まだ差別やそれに対する闘争はくすぶり続けている。

どうやらこの男たちは〈反ファウナス〉の活動家のようだ。

この界限で最も大きく有名なのは、ファウナスの権利と尊厳を取り戻すことをスローガンとした『ホワイトフアング』であるが、こいつらはその逆——おおかた、世間がファウナス差別を省みるあまり、逆にファウナスに特権が与えられている様が気に入らない連中と言ったところか。

少年は〈背中に隠した手〉にはめた、腕時計型の小型のコントローラーを操作した。羽織った大きなマントに隠され、その挙動は誰からも見えない。男たちに晒している、〈頭の高さに掲げられた両手〉は、風船を仕込んだダミーである。

(あと10秒——)

「ああ、話を戻そうか。ぼくの父の話だ。〈純粹に自分のことだけを考えてつくウソなら良い〉ってやつさ」

「止まれ。ガキ。人間だとしても本当に殺すぞ」

（6秒——）

「ぼくがこの言葉を気に入っているのはねーそこにウソをつくための〈覚悟〉が込められてるからさー！」

（ゼロ！ 決まった……！）

「……」

「お、おう……。で、何だ、その覚悟ってのは」

（あれ？ おかしいな）

少年の中で〈何か〉の段取りが狂ったようだ。表情には出さないが、背中のうちろで本物の手がせわしなく動いている。コントローラーのスイッチを連打する。

「ふむ、仕方ない、作戦変更」

「ああ？」

頭を切り替えた少年は〈彼の本物の腕〉を露わにすると、左腕にはめた腕時計の竜頭をピンと弾いた。

金属がこすれる甲高い音が甲板に鳴り響く。

腕時計から長く伸びた極細の鉄線が猛烈な勢いで巻き取られ、先端に結ばれたステッキが遙か遠くから、甲板に散らされた椅子や乗客の荷物などをなぎ倒しながら飛んでき



た。

さながら糸で操作されるミサイル。

少年の意のままに動くそれは男たちを端から猛烈に打ち据えた。

「な、何が起こってやがる！」

「まあ混乱するだろうね。それなら……〈手を貸してあげよう〉！」

頭の高さに掲げられていた〈ダミーの腕〉を男たちに投げつける。投げつけざま、手袋に仕込んでいた極小の針で、ダミーの基部になっている風船に穴を空けた。ぶしゅう、と音を立て空気が抜けるとともに、中から白色の煙が噴出する。

男たちの視界が煙でまったく遮られたあたりで、ぱし、と小気味良い音を響かせながらステッキが少年の手に収まった。

「さあ乗客の皆々様！ 今のうちに船室へお下がりくださいませ。船員の諸君はお客様の誘導を！」

少年が声高に叫ぶと、最初は躊躇いがちに、しかしじきにまとまった動きで乗客たちが移動をはじめた。

「まあ、観客が減つちやうのはぼくとしても本意ではないんだけどね」

煙の中で独りごちる少年の声を聞きつけたのか、周囲でいつせいに銃火器を構える音がした。

「おっと、観客はまだ残っていたね。ありがたいことだ」

「ああ、俺たちがしつかりと見といてやるよ。お前が穴だらけになるところをな！」

まだ煙が立ち込めていて、お互いは視認できないが、どうやら男たちが決してにこやかな表情ではなさそうなことはよく分かる。

——おそらく、人質にされている少女も。

存外、三本傷の男は物持ちの良い人物らしい。まだ辺りを覆う煙を観察しながら、少年はそんなことを思う。

「ああ、そういうえば話が途中だったね。ぼくの遺言だと思って最後に聞いていつてはくれないか。穴だらけになったら話すのも苦労しそうだ」

「状況わかってんのか、お前」

「ああ、分かっているさ。おそらく君たちよりもね」

——微かに、「何かが風を裂く音」が聞こえる。

「何だと？」

——音は近づいてくる。

「だって君たち、気づいてないだろ？」

「ああ？」

「頭上注意、だよ。諸君」

突如、煙が晴れた。と同時に。

音と質量の塊が、甲板に突き刺さった。

轟音。その衝撃で男たちのうち何人かが風に舞う落ち葉のように吹っ飛んだ。

「遅い。勝手にタイマー設定が掛かってたみたいだな。こんど修理しないと」

少年は落ちてきたそれを、不満げに眺める。

華美な装飾の施された、黒檀のような質感の——巨大な箱。大人が寝そべって入れ  
 そうな、棺桶のようにも見える。

「て……てめえ、ただじゃすまさねえ……」

三本傷の男がよろよろと立ち上がり、なおも銃口を少年に向ける。

「驚いた。ずいぶんとタフなんだね、君は」

「残念ながらも。てめえのタフさも試してやるよ！」

引鉄にかかる指に力が込められるのを視認し、少年は身構える。

「ケダモノの後でな！」

「しまった！」

男は銃口の方角を変え、先ほどまで彼が人質にしていた少女に向かって、弾丸を撒

き散らした。

しかし。

耳障りな、堅い金属が弾丸を弾く音。むろん、いかに頑強なファウナスであつても、生身で銃弾を弾くことができる者など、ごく一部の訓練された専門家を除けば、そうはいない。

「な……」

少女だと思われていた人影が立ち上がる。挙動ごとに、モーターの回る機械音が微かに聞こえる。

シルエットこそ女性のように見えるが、目も鼻もないのつぺらぼうの白磁の顔面。同じくつやのある無機質な素肌。関節の隙間から見える機械構造。動くマネキンとでも形容するべき物体が、そこにはあつた。

「やあ、〈ジャニス〉。名演技だね」

少年はにつと笑い、そのジャニスと呼ばれたマネキンを労う。

「いつの間に……てめえ、何なんだ！」

「ふふん、問われれば答えねばなるまい」

この上なく嬉しそうな笑みを隠そうともせず、少年はマントを翻した。

「このぼくこそは、かの偉大なる奇術師へゲッコー・ジャスパークの息子にして最後の弟子へ星火（シンフォ）・ジャスパーク！！？ 今日ぼくの臨時公演にご来場頂き、心から感謝するよ、諸君」

ばん。

シンフォと名乗った少年の口上を、銃声が遮った。

「バカが……余裕こきやがって」

シンフォは腹のあたりを押さえて屈み込む。

沈黙。

——は、どうやら性に合わないらしくった。

「——ふむ、口上を邪魔するとは無粋なお客もいたもんだね」

「何か仕込んでやがったか……！」

「奇術師っていうのはそういうもんさ。いつだってウソをつく。自分のためにね。観客

に見破らせない。落胆させない。常に驚かせる。奇術師のウソは——常に自分のためにあるのさ！」

突如、シンフォオのジャケットの裾のあたりから、何羽もの鳩が飛び出し、男に向かつて突撃した。よく見るとそれは生身の鳩ではなく、白い鳩を模した機械のようだった。

男は金属製の羽ばたきに苦悶しながら、何とか手でそれを払おうとする。

「無粋なお客様にはご退場願おう。……今度はちゃんと動いてくれよう！」

シンフォオは腕を大仰に掲げ、指を大きく鳴らした。

「スナツプ一回で——戦闘準備！」

指の音に呼応するかのごとく、甲板に突き刺さった〈箱〉がガチャガチャと音をたて、動き始めた。

黒檀の表面にうつすらと継ぎ目が現れたかと思えば、掌くらいの大きさの穴が口を開く。

その穴からは薄い金属製の何かが頭を見せ、陽光に反射し不吉に光る。

「スナツプ二回——照準あわせ」

シンフォオの指から軽やかな音が鳴るたび、機械の棺桶がそれに応える。

鋼鉄の羽ばたきに苦しむ男はその状況を知ってか知らずか悶え続けている。

「鳩たち、戻っておいで」

シンフォオが腕時計に軽く触れると、男に群がっていた機械の鳥たちは雲が晴れるように方々へ散っていく。解放されたと思った男は、しかし安堵の表情を見せることはなかった。

「さあ、これで大詰め」

機械の棺桶から覗く、無数の刃が目に入ったからだ。

「ステッキで——地面を三回」

「こんこんこん、と軽い音が響く。

と、同時に。

「さあ、プレステイツジだ！」

「ぼしゅう、と音をたて、棺桶から何本もの剣が発射された。

「お、おおお……!?!」

男は死を覚悟したが、しかし刃がその身を貫くことはなかった。

剣は男の身体を逸れて飛ぶ。何本もの剣はお互いに交差しあい、柄に取り付けられたワイヤーが絡み合うと投網のように男を捉えた。男の体を幾重にも縛り付け、体の動

きを封じる。

バランスを取るすべを失った男は、たまらずふたたび甲板に倒れ伏した。

「て……てめえ、放しやがれ！」

「承服しかねるね。君はこのままこのお船に乗って、ミストラルの警察に捕まるといい」  
文字にするにも気がひけるような悪口悪句罵詈雑言を尽くす男を尻目に、シンフォは悠然と箱に歩み寄る。例の腕時計の文字盤あたりを指でなぞると、箱が大きく揺らぎ真ん中から二つに開いた。

「——ん、んん……」

その中には、先程まで人質になっていたファウナスの少女が目覚まそうとしていた。頭から屹立する狐のような大きな耳がびくびく、と震える。

「怪我はないかい、お嬢さん」

優しい手つきで少女を箱から出す。まだ力が入らないのか、ぐったりと体を預けてくる。

「君、案外背が高いんだな……」

すこし不満げに呟くシンフォの口は、少女の肩あたりにかかる髪の毛に塞がれてし



まっていた。そのままゆっくりと座らせ箱に背をもたれさせる。意識が曖昧な女性を安全な姿勢にさせるという、紳士としては大仕事を終えたシンフォは大儀そうに手をぱんぱんと二回叩く。

「さて、この子の連れ合いでも船に乗っていればいいんだけど……」

と独りごちるシンフォの背中を、固い感触の指が叩いた。振り向くと先ほどの機動マネキン・ジャニスが無貌の顔を向けている。

「何だい、ジャニス？」

ジャニスはパントマイマーのような動きで、すぐ横を示す。

「？」

示された方向を見たシンフォは絶句した。

例の巨大な箱が唸りを上げ、変形していく。

今度は方々から大砲の砲身のようなものによきによきと生え、その中心には攻撃的な色をした禍々しい光が集まっていく。

「あー……何だっけ、拍手二回は……」

少女を座らせた時に、ついうっかり取った挙動。拍手二回。それは――

轟音と閃光がシンフォの思考を遮る。

あさつての方向に照射された光が、船室の端を削り取っていった。

そして。

「やばい……最大出力のビーム砲！」

轟音。轟音。轟音。

ビーム砲は一つではない。三度、四度と放たれる高エネルギーの本流は、船体に順調に穴を空けていく。

「わーっ！ 止まれ！ 止まってっ！？」

ビームを乱射する砲台の下で耳をー頭の上方の耳をー抑えてうずくまる少女をマントを広げてかばう。大慌てで腕時計の文字板を連打すると、砲身の塊と化していたそれは、元の箱の姿へと戻っていった。しかし時は遅かったようで、客船は方々から煙と炎を上げていた。

「！ 乗客は？ 無事なのか！？」

青い顔をして甲板のへりから身を乗り出すと、既に大方避難していたのか、救命艇にぎゅうぎゅう詰めに乗り込んだ乗客たちが、シンフォオに向かって手を振ったり口笛を吹いたりしている。どうやらこの光と炎の競演も、彼らには謎のヒーローの勇敢なる闘いの演出のように見えているようだ。

シンフォオは安堵のため息を漏らしたが、表情は暗かった。

船体が悲鳴を上げる。方々で小さな爆発も起こっている。もうここにとどまるのは危険なようだ。

踵を返すと、機械仕掛けの箱に向かって歩いていく。腕時計を数回指で叩くと、再び箱は駆動音とともに姿を変えていった。小さな翼が生え、ビーム砲の砲身だったものが今度は地に向き、人がちようど掴まれそうなハンドルが現れる。

少女と目が合った。少しまだ眠そうな目、鮮やかな紅色の瞳はぼんやりとシンフォオを見つめる。

「……君も、早く救命艇へ。ここは危ないよ」

少女は答えず、ただシンフォオのマントの裾を、ぎゅ、と握りしめた。

「一緒に来るつもりかい？ でもぼくは実はこれから大事な用があるんだ。入学式。ツイてないよな。間に合うかも分かんないけど」

「……わたし……も、これから、学校はいるの。へイヴン・アカデミー」

はじめて少女の話す声を聞いた気がした。ふわふわとした、眠そうだが、その微睡みに連れていかれそうになる、引き込まれるような声。

「驚いた。じゃあ君とぼくは同級生？」

自分より背の高い女子が同学年ということにショックを受けたそぶりなどおくびにも出さず、微笑みかける。

「改めて。星火・ジャスパ―。シンフォでもいいし、親しい友人はへシンンって呼ぶ。どっちでもいいよ。君は？」

差し出す手。白い手袋をはめた、奇術師の、人を驚かせる為の手。

「……アマレット。苗字は、長くて……忘れちゃった。へみぶんしようには、へアマレット・D・Kって、かいてあるよ」

それを掴む手。

「ふむ、変わった子だね。面白い縁になりそうだ。よろしく、アマレット」

二人は小型の飛行装置に変形した機械に捕まり、洋上からミストラル海岸近くの街まで、短距離の空中移動を行った。

快適とは言いが難かったが、いささか風変わりな前哨戦を終えたシンフォは、これからのハイヴン・アカデミーでの学校生活への期待で胸を高鳴らせていた。その視線はまっすぐ前を向いている。

だから気がつかなかつた。彼にしがみつくと少女・アマレットがどんな表情をしているのか。

さつきまでの眠たそうな貌はどこにもない。目の前の男にどれだけの利用価値があるのか。こいつはどれ程自分に従順に働いてくれるのか。品定めをするような毒婦の貌。

シンフォの身体を掴む手。爪の長い、詐欺師の、人を利用する為の手。それは、シンフォの胸——心臓近くにしっかりと力を込めていた。

これから数日後、シンフォはもう二人の人物と出会い、アマレットと四人でチームを組むことになる。

嘘つき。

ペテン師。

奇術師。

詐欺師。

そんな四人からなる、当代随一の問題児チームへXUXA（シューシャ）。

それは、瞬間的に最も有名になり、そしてハイヴン・アカデミー史上――

最も早く解散したチームの名前である。

ep. 2 `Unakite Abagnale`  
 X " U " X A |

※※※

始まりは、夕焼けだった。

呪わしいほどに美しい夕焼け。

逃げ出したライオンに、ピエロの死体。

動かなくなったブランコ乗りに、焼け落ちたテント。

全てが夕焼けに赤く照らされている。

ぐちゃぐちゃになった馬の死体の間から顔をだした幼い少年の目の前には、そんな光

景がひろがっていた。

吐き気を催すほどに綺麗だと思った。

少年の手が弱々しく引つ張られる。

ああ、この子も生きていたんだ。

不思議と、嬉しくはなかった。

自分が拾ってしまった生命に対しての責任が重い。

この子は、生きている限り僕が生かし続けなければいけない。そんな重圧。だから、ここで死んでくれていた方がー。

「……これから、どうするの……？」

馬の死体の中から、少女の小さな声がする。

「わからない。とにかく、一緒に行こう」

少年は力を込め、少女を引っ張り上げる。傷だらけの体が、さらに血塗れになっている。

彼女の血ではなからうが。

「きつと大丈夫だよ」

少年はできる限り優しい声音で言い聞かせた。

それは、少年が初めてついた、嘘だった。



※※※

「じゃ、次の方、どうぞで」

つくづく集中力がいいよな。俺って。

ハーベイは冷静に自分の欠点について考察するが、しかしそれを改善しようという気はなかった。

新入生の名前を聞き、IDを受け取り、手元のデータベースと照合して、目の前のガキどもが、映えあるヘイヴン・アカデミーが迎えるべき新入生であることに疑いがないことを確認する。そして講堂で待機するよう伝える。

重要ではあるが単純な仕事。必要なのは集中力だけ。しかし、好きなバンドのニュー・アルバムですら通して聴けないほどに、何事も長続きしない性格であるハーベイは、ゆうべしこたま飲んだウォツカが抜けきらないこともあり、その業務に早々に飽きつつあった。

入学式の受付なんてアルバイトにでもやらせりやあいいのに。

ああ、早く終わって生徒指導課のラストイと飲みにいきたい。

さいきん頻繁に向こうから連絡が来るから、脈は間違いなくある。昨日だって。

今夜いよいよキメてやる。

そんなことを考えていると、脳に本来行くべき血流が下半身に集っていき、睡魔がハーベイの眼底付近を飛び回る。それがなけなしの集中力を食い尽くす。最後の一边がまどろみに溶けていきそうになった時、急なエラー音が彼を現実に引き戻した。

エラーなんて、今日をはじめて起きる。

2、3回念入りの瞬きをして、眼球のピントをモニターに合わせる。

「該当者なし」

これ以上に説明の必要がないほどにシンプルなエラーメッセージが画面の中央にポップアップしている。由緒あるアカデミーの合格者名簿に抜けがあるはずもないから、こういうパターンはIDのリーダーに不調があるか、不合格だったイカれた奴がゴネに来たか、どちらかに絞られる。

念のためリーダーのセンサー部を専用のクリーナーで雑に拭き、再度IDをかざす。

「該当者なし」

再びのエラー音。

ハーベイは消去法で目の前の少女を不合格だったイカれた奴と認定する。

とはいえ、今年不合格であったとしても未来の英雄になる少年少女かもしれない。決して邪険に扱ってはならないと今朝のブリーフィングで班長のブレイブブルからのお達しもあった。あの筋肉馬鹿、偉そうに。

だから優しく、諭すように。

「ええと、失礼。何か間違いがあるみたいだ。もう一度、お名前を訊いても?」

おどおどとした目の前の少女は不安と焦りを湛え、涙目で答える。

「キ、キセラです……キセラ・バルサミカ。イニシャルはXだから、名簿の後ろの方にあるはずなんです。もう一度、確認してもらえませんか……? 合格通知だって……!」

この時。

ハーベイにもう少しの集中力が残っていれば、

いま少しの注意力があれば、

危機感があれば。

キセラ・バルサミカの不正入学を防ぐことができているらば。

このヘイヴン・アカデミーはほんの少しだけ平和に保たれていたかもしれない。

※※※

「キセラ。段取りの確認だ。このIDを持ってお前は受付に行け。一発でシステムには弾かれるだろうが、何か間違いがあったみたいな顔をしてなんとか繋げ。その間に――」

「わーかつてるよ。ここの学長に《偽装》したお前が受付の奴を丸め込むんだろ？　ハマぶっこくんじゃあねえぞ、クソメガネ」

「殺すぞ。ライオンハート教授には先月の講演会で会ってる。記憶も鮮明だからセンブルランスの《偽装》がバレるようなことは有り得ねえよ」

「ユナは演技が固えからなー。古参の教師とかが受付やってたら一発でバレんじゃねえの？」

「甘く見るんじゃねえ。《ハーベイ・ウォールバンガー》って奴の窓口なら100%突破できる。ゆうべ酒場で同僚の女とよろしくやってるときに話しかけてみたが、堅実・正確とは無縁な男だったさ」

「ああ、言ってたアカデミー職員の溜まり場みてえな所か。そりやいいカモだな」  
「できる限り列の後ろに並べ。お前の番になるころには大した注意力も残ってないだろう」

「あいよ。ユナカイト君の指示通りに動いてやるよ。まあ、何とかなんだろう」

「じゃあ、」

「ああ」

「やるか」

ミストラル王国にその名を轟かせる名門校《ヘイヴン・アカデミー》の入学式。それが始まる少し前、どこかでこんな会話が あったという。

※※※

「い、いえ！ たぶん俺が指示を見落としてたんです。すみません、学長自らお越しになるなんて……！」

いかに怠け者のハーベイとはいえ、目の前にアカデミーの学長が現れた時は相応の態度になるようだった。

「謝るのは私のほうだよ、ウォールバンガー君。こんな大事なことを伝え忘れていたなんて。こちらのミス・バルサミカは私の古い友人の忘れ形見でね。《特別推薦枠》で今年から我が校の生徒となる」

「と、特別推薦……」

はて、そんな仕組みがウチにあつたつけ、と疑問符が頭をよぎるが、他ならぬ学長がおっしゃるのだ。俺が忘れてるだけでれっきとした制度なのだろう、という面倒くさがり特有の思考の果てに、なけなしの疑問符は空中に溶けていった。

「分かりました！　そういうことであれば！」

「悪いね」

ライオンハート教授はハーベイに微笑みかけると、《特別推薦枠》の少女を伴って校舎の中へ消えていった。

ハーベイはそれを横目で見送る。

ん？

新生生はこのあと講堂に集められるんじゃないかなかったか？

何故校舎に入っていく？

妙だ。

脳裏に次々と疑問が浮かぶ。思えば最初から妙だった。

特別推薦枠なんて、本当にうちにあつたか？

推薦なら推薦で俺らに情報がないのはなぜだ？

ハーベイは立ち上がり、ライオンハート教授が消えていった方向へ――

走り出す、というようなことはなかった。

まあ、学長の客だしな。

何か俺の知らない事情があるんだろう。

そう自分を納得させると（面倒くさがりは、自分を納得させるといふことに抜きん出た才能を持っているものだ）、再び自分の席に座った。

「じゃ、次の方、どうぞ」

※※※

入学式のアナウンスが遠くから聞こえる。

薄暗い廊下の二人はそれにも止めず、足早に歩いていく。

無数に並んだ扉の一つの前で「ライオンハート教授」が足を止めた。急に立ち止まったから、後ろをついてきた小柄な少女——キセラは教授の背中に顔をぶつけた。

「オイ」

キセラはいやに低い声で抗議する。

「フム、みたところ物理錠だけ……ここなら行けそうだな」

抗議の声もどこ吹く風で、教授はドアノブに手を掛ける。2、3回ガチャガチャと音を立てると少し何かを考えるように手を止めた。

「ごく普通のインテグラル錠だ。ドアノブの中央にシリンダー。キセラ」  
「何をしてほしいか具体的に言えば、ボケナス」

短く呟く教授に、キセラは再び抗議するが、何を求められているかは心得ているようで、小さな手でドアノブを掴むと静かに目を閉じた。

一瞬。キセラの手の表面に、紅色の薄い光の幕が現れた。

ドアノブの中で小さく、ぱきん、と何か大事なパーツが壊れる音がしたかと思うと、  
「おら、出来上がりだ、ユナカイト君。おっと、今は《教授》の方がいいか？」

きい、と音を立てて施錠されていたはずの扉が開いた。

「いやー」

《ライオンハート教授》は皮肉っぽい笑みを浮かべて、指を鳴らした。

すると、たてがみのように豊かな金髪を湛えた大柄な中年男性の姿が煙のように「解けて」いく。その残滓の中からは、《教授》とは似ても似つかない、長身を深い緑のコートで包んだ少年が現れた。

コートの内ポケットから、金色縁の眼鏡を取り出し、慣れた手つきで装着する。

「《教授》はここにはいないが？」



少年——ユナカイト・アバグネイルは凶悪な笑みを浮かべた。

※※※

「おいユナ。ユナカイト。早くしろよ。着替え終わつちまうぞ。アカデミーの学生登録はもう終わったんだろ？」

「当たり前だ。これで俺ら2人とも、晴れて名門ハイヴン・アカデミーの生徒つてわけだ。データ上はな」

鍵を破壊して侵入したのは小さめの講義室だった。

いまは入学式の真つ最中だから、当然、無人である。

この不法侵入者2名を除いては。

「せっかくこんなところまで潜り込んだんだ。使えそうなデータを探してるのさ。学校のことをよく知りたいと思うのは、新入生としては当たり前だろ？」

講義室中央のコンピュータと睨み合つてそう冗談めかすユナカイトを助けもせず、キセラは身だしなみにご執心だった。

白い、ふんわりとしたブラウスを雑に脱ぎ捨てる。

「コツチ見るんじゃねえぞ」

「誰が見るか、クソブス」

ひひひ、と汚い笑い声を漏らしつつ、ぎらりとした光沢のあるベスト、けばけばしい赤いレーザーのジャケツトを纏う。妙な形の髪留めで長い髪を4つにまとめ、鬱陶しそうに首を振る。外からわずかに漏れる光が透けると、靡いた髪が濃いピンク色に光った。

ふう、と一呼吸。

「終わっちゃったけど。着替え。ブラウスいる？脱ぎたてだぜ」

「うるせえぞ黙ってる。その辺の無目的に生きてそんな中年にでも売っぱらっとけ」

ニヤニヤと笑みを浮かべるキセラに罵声を浴びせながらも、ユナカイトの両手は淀みなくコンピュータを操作していた。メガネにモニタの光が淡く反射する。

何かに気づくと、レンズの奥で目を細めた。

「はっ、面白え」

そういうと、おもむろに眼鏡を外してたたむと、側面をコンピュータのメモリスロットに差し込んだ。ユナカイトのメガネ本体がデータ記録媒体になっていたようだ。

「なんだよー何みつけたんだよー」

いつのまにかすぐ背後まで来ていたキセラはユナカイトにおぶさりかかる。

「見ろよ、アカデミーの出納記録だ。ここの、《ロングテイル・パートナーズ基金》《ホーセズネット・キャンプ》《遠吠えの会》への送金。ここ数ヶ月で急に始まっている。妙だと思わねえか」

「あ？ どこもファウナス支援団体だろ？ 学長がファウナスだし、ファウナスの職員採用率もレムナントで一番多いらしいし、寄付くらいしても不思議じゃなくねえ？」  
 「馬鹿かてめえは。よく見ろ。3つの違う部署からの申請でどれも月に1回ずつ。しかもすべて同じ金額。わざわざ部署を分けて送金する理由は何だ？ いきなり三つの団体に同額で支払い始めたのも不自然だ」

「……：そういやこの送金が始まったのって、ヴェイルとかアトラスでダスト強奪事件が増え始めた頃だよな。あの辺の事件はファウナス……ホワイト・ファングが噛んでるって話だったけどよ」

画面の端のステータス表示が、データのコピーが終わったことを報せる。

手際よくメモリ・スロットに挿さった眼鏡を抜き出すと、ユナカイトは再び装着した。

「これは、思ったより楽しい学生生活になりそうだな」

もたれかかるキセラを振り払い、ユナカイトが立ち上がるうとしたそのとき、講義室の入り口の方から男女の声があった。

「ブレイブブルせんせ？ ほら、ここなら誰も来ないから……ね？」  
「ネ、ネイル先生……今は仕事だ。こういうのは……」

男の劣情を刺激することに特化して調整されたような甘ったるい女の囁きと、必要以上に自分は理性的である、とでも主張したような男の声。

コンピュータの陰に隠れたユナカイトとキセラは聞き耳を立てる。

（ユナ！ なんだアレ！ オフィスラブってやつか？）

キセラはひどく楽しそうだ。

（ブレイブブル……昨日ウォールバンガーから聞いた名前だな。入学式の入場周りの班長だったとか）

そう言うってユナカイトは眼鏡の縁を何やら操作している。レンズの裏側に無数の文字が浮かび上がる。

（ああ、あった。ゴードン・ブレイブブル。ハイヴンの戦闘実技の教師だ。はは、妻子持ちだよ。あんな女教師に言い寄られてやがる）

（やつぱ男はああいう分かり易くエロい感じのが好きなのか？）

（俺はお前以外なら誰でも良い）

（奇遇だな。あたしもお前だけは願い下げだ）

「ね、ブレイブブルせんせ、考えてくれた？　お願い聞いてくれたら、なあんでも言うこと聞いてあげる」

「お、お願いとは……」

声しか聞こえないが、ブレイブブルの表情は眼に浮かぶようだった。衣摺れの音、声の感じから、ネイルという女がどれだけブレイブブルに密着しているかも。

(ネイル……ラステイ・ネイルか。ウオールバンガーが口説こうとしていた女だな、確か。生徒指導課の教員らしいが、これは……)

「わたしたちに、力を貸して欲しいの。ブレイブブル先生みたいな、たくましい人、ずつと探してたんだから？」

「力を貸す……？」

「わたしたちは、とつても良いことをしようとしてるの。ハーベイだって随分乗り気だったわ。ねえ、わたしの仲間になって？　わたしを、守って」

(なーユナ、あの女の声、妙じゃねえ？　さつきから聴いてると、何か妙な気分になって

くるぜ)

(声……?)

ユナカイトは何かに気づき、テーブルから顔だけ出してラステイ・ネイルの姿を確認した。

声だけではなく、もつと早く姿を確認していれば、ユナカイトはもつと早く警戒態勢を取れただろう。

しかし遅すぎた。

ラステイの手は皮膚でできた大きな翼になっていた。妖艶な顔の横には大きな耳が屹立していて。

それはまるで、反響定位で空間を認識できるほどの発達した聴覚を持つ――

「コウモリのファウナス……！ キセラ、俺らは気づかれているぞ……！」

目があった。

そうユナカイトが感じたとき、すでに彼の背中は講義室の壁に叩きつけられていた。

※※※

「ずいぶん難しそうなお話してたじゃないの。アカデミーの情報をそんなに集めて何に使うつもり？ 新入生くん」

「へ、ハイヴンに入学できたのがあんまり嬉しくてね……好きなものを知ろうとするのは当たり前でしょう？ ラステイ・ネイル先生」

呼吸を整えながら軽口を叩くユナカイトを蔑むような目で見ながら、ラステイは歩み寄る。

「《好奇心が猫を殺す》って言葉は、ジュニアのうちに覚えておくべきだと思うけど」

そう言つてラステイは呆れたように視線を上に向ける。

油断——

見て取つたユナカイトは、自分が背にした壁の破片を掴み、ラステイの顔面目掛けて投げつける。

が、しかし。

標的に接触する前に破片は粉々に砕け散つた。

「だあめよ、新入生くん。そんな粉塵だらけの石つころなんて、わたしの《超音波》で粉砕してくれつて言つてるようなものじゃない」

「——!!？」

なるほど、超音波か。コウモリのファウナスらしい能力だ。付着した粉塵を超音波で

振動させて、破片を砕いたわけかー。

ユナカイトは瞬時に思考する。

さつき俺を吹っ飛ばしたのも、大出力で空気を振動させて衝撃波を起こしたとか、そんなところだろう。

中距離の小規模な攻撃は超音波で迎撃される。

遠距離のままでは大出力の衝撃波を放つスキを与える。

ならば。

「キセラ！ 《ハエトリグサ》だ！」

ここまで実に1秒。

不意の号令に、ラストイは片眉を上げて警戒する。彼女の優れた聴覚と、反響定位の能力で、侵入者がユナカイト以外にもう1人いることは分かっていた。

彼よりもずいぶん小柄な、声からするに女子生徒。

賢しげな彼のこと、ラストイが苦手とする近接戦闘を仕掛けてくることは必定。小柄な女子生徒をけしかけられるなら、狙いは下方向——

自信満々に迎撃体制に入った、そのとき。



めき……

べきべきべき、と耳障りな音を立てて、床板が《裏返つて》いった。

「なっー」

床板がちようど足元からひしやげ、食虫植物さながらにラステイを捉えた。

丈夫な木材でできた床板は万力のような力で捻じ曲げられているようで、ラステイの腕力では僅かにも動かない。

「くっ、こんなもの！」

ラステイは怒りの形相で口腔を大きく開ける。彼女を中心に粉塵が巻き上がり、床板がめくれたために発生した大量の破片が周囲で次々と碎けていったが、その身体を戒める床板だったものは微動だにしなかった。

「やめとけよ、先生。あんまり暴れると、そのキレイな肌がスタボロになるぜ？ あたしみたいにな」

その様をニヤニヤと眺めながら、キセラが机の下からゆっくりと這い出てきた。

「人間ふぜいが、よくも……！」

「ずいぶん人間が嫌いみたいだな。そんなにファウナスと人間の対立構造が好きなのか

？ 例えばーホワイト・ファンクに資金提供をするほどに」

「はっーずいぶん調べ物に熱心だったみたいね、坊や。でも残念。あなたが辿り着けるのはここまでよ」

触手めいた木材に戒められながらも、ラスティの表情には余裕がある。

「学生だからと甘くみているな。こちとら潜ってきた修羅場の数が違う。お前みたいな女から情報を聞き出す手段も、死なないように苦痛や快楽を与え続けるやり方も、いくらでも知ってるんだよ」

「威嚇が下手ねえ、坊や。背伸びするんならちゃんと言なさい」

「何?」

「じゃないとー《上》のものが見えないわよ」

「ごおん、と轟音。」

辺りの机やらコンピュータやらはたまらず吹き飛んだ。

ユナカイトとキセラも咄嗟に防御態勢を取るが、衝撃に煽られ倒れこむ。

「さっすが、ブレイブ先生。ファウナスの闘士はこうでなくっちゃ」

ラスティがうっとりとして眺める視線の先には、双眸を爛々と輝かせた筋骨隆々な男が

立っていた。

「ふうっ……、ふう……っ、よくも我が同胞を傷つけたな……！」

荒い息遣いは、前方向に突き出た大きな角を持つ頭を上下させている。上半身に纏ったベスト状のライトメイルが軋んで軽い金属音を上げた。

ユナカイトは衝撃に眩む目の焦点をブレイブブルに合わせて、姿や挙動を確認する。(ネイルと話していた時とずいぶん様子が違う……)

訝るユナカイトの頭が無遠慮に上から押される。キセラが頭について起き上がるうとしていた。

「お前……」

「おいユナ、なんだありや。どうなってるのか全然わかんねえ」

「……ああ」

「ヤクでもキメてやがんのか？ センプランスって訳じやなさそうだけ。アイツの声が怪しいと思ったんだが、違ってみたいだ」

「……！」

ユナカイトは何か気づいたが、キセラに伝えることはできなかつた。

猛スピードで接近してきたブレイブブルに、キセラが捕らえられたからだ。

大きな岩のような手でキセラの喉笛をしっかりと掴み、そのまま持ち上げる。

小柄なキセラは宙に浮き、苦しそうに両脚をばたつかせた。

「キセラッ!!?」

と呼びかけようとしたが、再びユナカイトは壁に叩きつけられる。ラストイの放った衝撃波だった。

「はい、おしまい。君みたいな頭でつかちは、だいたいこういう力には敵わないのよね」  
荒れ果てた床に転がるユナカイトの近くまで歩いていくと、軽く脇腹を蹴りつけながら嘲る。

「でもまあ、その歳にしちや頭が切れる方だし? 絶対にわたし達に従従するっていうんなら、2人とも生かしといてあげてもいいけど」

「く……」

苦悶の表情のユナカイトから、眼光が失われつつあった。

予想外の強敵。

万全だと思われた計画の頓挫。

そのどれもが、ユナカイトの自信を打ち砕いていったのだろうか。

「逆に言うとな、坊や。わたし達に従わないと、2人ともここで始末するから。入学式な

「なんて晴れの日のアカデミーでこんなことするなんて、相当根回ししないと揉み消しやできない」

「……………」

「2人とも一生わたし達の元で働くか、この場で死ぬか。選りなさい」

ユナカイトの顔が青ざめていく。

「や、めろ……………」

「ん？」

「やめてくれ、俺なら従う！ 従うから、キセラだけは逃がしてくれ！ 俺の計画に乗せられただけなんだ。あいつは関係ない！」

「あつはははははははははは！」

必死の形相で嘆願するユナカイトを見下ろし、ラスティは哄笑する。

「う……………ユナカイトは悪くねえ……………あたしだ、みんなあたしが言い出したんだ。だから……………」

ブレイブブルに首を抑えられたキセラも声を絞り出す。

「たまんない、そういうの。さつきまでいい気になってたガキが打ちのめされるのって

最高！」

仰け反って笑うラスティは短い髪を少し直す。

笑みに歪んでいた顔が、一瞬にして冷徹な表情に変わる。

「嘘に決まってるでしょ。ブレイブブルせんせ？ その女の子の首を砕いてやって」  
光のない眼でユナカイトを見下ろしながら、そう言う。

「やめてくれーッ!!」

ユナカイトの慟哭が講義室に響く。そして、キセラの頸椎を砕く、鈍い金属音がー

金属音？

ラスティは弾かれたようにブレイブブルの方を振り返る。

そこには。

「ぐ、ぐおおおおおおッ!!」



奪ったままで」

ユナカイトは大儀そうに立ち上がりながら呟く。

「わたしのセンブランス……そんな、見破ってなかったじゃない。それにさつきまで、あんなに命乞いまで……」

「嘘に決まってんだろ」

ユナカイトとキセラ、2人が同時に答える。

ユナカイトは不機嫌そうに。

キセラは楽しそうに。

しかし、2人とも、けだものじみた表情で。

幼い日。ユナカイトとキセラが決めた2人だけの暗号。

キセラがユナカイトの頭に触れたあとは、キセラは嘘しかつかない。

だから、ブレイブブルからの一撃目をもらったあの後から、キセラは本心とは真逆のことしか言っていないかったのだ。

だから、声にまつわるセンブランスがブレイブブルを操っていることも、キセラは看



破っていた。

それがわかったユナカイトも、キセラの思惑に合わせて行動したのだ。

「またあたしの勘が大当たりだな」

「まあ、そこは認めてやるよ。動物みてえな勘はな」

さて、と呼吸を整えた2人はラスティを見遣る。

動揺していたラスティは、多少の余裕を取り戻したようだった。

「ふ……やるじゃないの。まだ15、6かそこらだろうに、随分と荒い手を使うわね。アカデミーの教師をこんなにしちやって、あんたたち、何が目的なわけ？」

「目的？」

「わたし達の組織の邪魔をしようってんなら、手を退いて、一生黙ってることね。下手に首を突っ込んだら、死ぬくらいじゃ済まないわよ」

ユナカイトとキセラは顔を見合わせ、下手な冗談を聞いたみたいに笑う。

「組織が何なのかなんて知らないし、そんなもんに興味はない」

「あたし達は楽しんで自由に暮らしたいだけだ。これは本当」

だから脇の甘い大人どもの弱みを集めてんのさ、とキセラは邪悪に笑う。

「はは、何それ……そんな奴らにこんなにされたって訳……」  
ラスティは俯き肩を震わせる。

「冗つ……談じゃない!!!!!!」

台風のような風圧が一瞬で生まれた。

「また衝撃波。ワンパターンめ」

しかし急な反撃を予期していた2人は中空で態勢を整えると、難なく着地した。

「間合いは取った……丸腰のガキ2人、この距離で廻り殺しにしてやるわ」

「丸腰? ああ、そういやそうだな。じゃ、ユナ。ここは任した」

そう言うときセラはその場に胡座をかいて座り込む。

「馬鹿野郎。センブランスで援護くらいしろ」

「えーめんどくせえよ。あたしばっかオーラ使って、もうガス欠なんだよ」

「クソが……!」

ユナカイトの悪態は、大きな風の音でかき消された。ラスティが両手の翼で宙に舞い上がったのだ。

「そこでじっとしてなさい。ゆっくり痛めつけてあげるから」

そう言うところステイはキセラを警戒しつつも、空中からユナカイトを観察する。

あの重そうなコートには色々仕込めそうだけど、特に異音もしない。

仕込んでいて袖口に刃物くらい。

それより気になるのは、これ見よがしにごちゃごちゃした造形のブーツ。

あいつが歩くたびに妙な音がする。

飛び道具くらいは搭載していると見るべきか。

ならば。

態勢を整えたラスティは口笛のような挙動で何かを放った。

と、ユナカイトのすぐ側の床に弾痕のような丸穴が空いた。

(極小の衝撃波か)

それを見てユナカイトは瞬時に正体を看破する。

出力は小さいとはいえ、当たりどころが悪ければ怪我では済まない。

距離を取られたまま狙い撃ちをされ続けるのならば――

「あまり時間は――無いな!」

そう叫ぶと、履いた金色のブーツの各所が唸りを上げる。

「俺の流儀じゃないがな」

機械仕掛けのブーツの所々が変形していく。

踵のパネルが外側に広がり、中からホイールが現れる。

脛の装飾が回転し、小型の機関銃が狙いをつける。

「大盤振る舞いの正面突破と行こう」

ホイールが高速回転する。

瞬時、講義室を猛スピードで滑走し出す。

脛の機関銃が火を噴く。

短いが断続的な射撃音。

ラスティは旋回し難なく躲す。

「見え見えよー囃でしよー！」

火線でラスティの位置を誘導し、ポイントに到達した時点でユナカイトも飛び上がり、迎撃する。

この装備での基本戦術ではあるが、流石にそれは見透かされていた。

逆にラスティが自ら急降下し、ユナカイトに急襲を掛ける。

「折り込み済みだ」

踵のホイールが逆回転。

急制動の反動を利用し、そのまま体を縦回転させながら迎撃の蹴りを放つ。

いわゆるサマーソルトキック。

「あうっ！」

短く喘ぐラスティに追撃を掛ける。ホイールの推力で加速し、吹っ飛ぶ相手に追い討ちの回し蹴りを二回、三回。床に叩きつけるー

つもりだった。

瞬間。ラスティの全身から空気の振動が発生した。

ユナカイトは態勢を崩し、落下した。

「はあ、はあ……ほんとに消耗するから、使いたくなかったんだけどね……」

見ると、ラスティの翼の皮膜に細かい傷や穴が無数に付いている。

超音波を翼で増幅させ、全身から衝撃を放つ、奥の手。

攻撃が広範囲に渡るため致命傷を与えることはできないが、窮地に追い込まれた時にだけ使用する能力だった。

ユナカイトが落下したあたりには粉塵が立ち込めている。

攻撃の途中で態勢を崩したのだ。床に落ちただけでも相当のダメージになっているだろう。

ラスティは辺りを見回し、手頃な長い木片を手にする。

槍のようにして持ち、ユナカイトが落下した辺りに向かう。

「ほんと、惜しい……。あんたがファウナスだったら、間違いなく仲間欲しかったわ」  
粉塵が晴れる。そこには倒れ伏したユナカイトが――

いなかった。

そこにいたのは、驚いた表情の。

「わ、わたし……?」

ラスティ・ネイルだった。

「ど、どういうこと？ これは……」

彼女自身と、鏡のように全く同じ動作をする彼女が眼前に存在した。彼のセンブランスか。それとも別のーと。

考えを巡らせてしまったのが命取りであつた。

「なんてな。まあ、これでさよならだ」

目の前のラストエイの姿が《解けて》、ユナカイトが不敵な笑みを浮かべる。

事態がいまだに飲み込めない様子。ラストエイめがけて、ブーツに仕込んだダスト銃が連続で弾丸を撃ち込んだ。

吹っ飛んだラストエイは講義室の黒板のど真ん中にめり込む。

「が……あ……」

まだ意識を手放さないラストイに歩み寄り、

「まだやるか？ 流石にこんな日に人死に出すつもりはない。お前が後始末をするんだからな」

言い放つ。

「心配するな。お前が何か企んでいることは他言しない。自主的には、だが。そのかわり、俺とキセラには二度と手出しするな。こう見えても、俺らは楽しくて充実した学生生活を送りたいんだよ。そんな生徒に協力するのは教員の務めだ。違いますか？ 先生」

「最……低だわ……あんた……」

息も絶え絶えに悪態を絞り出す。

「知ってるよ」

ユナカイトはそう答えた。



※※※

おかしい。何度掛けても電話に出ない。

ハーベイ・ウォールバンガーは今しがた、16回目のコールを終了したところだった。あんなに熱心にアプローチをかけてきたラスティ・ネイルに、今日は繋がらない。

退屈な入学式の受付業務を終え、今日はばあつと飲みに行き、あわよくばラスティをモノにしようとしていたのに。

「ああ、フラれたかあ……」

実際はそれどころではないことがラスティには起きていたのだが、彼の知るところではない。飽きっぽい彼のことだ。数日後には立ち直っていることであろう。

「ウォールバンガーさん、お疲れ様です」

うなだれるハーベイに、劳いの声をかけるものがあつた。

「おわ……あ、エイズル先生、どうも」

黒づくめの格好に、黒い長髪。病人のように白い面長な顔をしたエイズル・ヌウが急に現れたものだから、ハーベイは流石に驚いた。

「もうお帰りですか、エイズル先生は」

「ええ。入学式ですから、立ってただけだったんですがね、どうも人が多いと疲れてし

まっつて」

弱々しく微笑むと、去っていく。

見るからに不健康そうではあるが、丁寧で人当たりは良いので、職場内でも評判は悪くはないのだ。

入学式も終わり、陽が傾く。

西日の方向に去っていくエイズルの影が長く伸びていた。

黒く、まるでエイズル本人のような影。

山羊のファウナスなのか、側頭部から生える大きな角も、くつきりと影を作っている。

片方だけ、欠けた角。

どこか歪な影。

それを眺めながらハーベイは――

特に何も考えていなかった。

※※※

「じゃ、入学おめでどう、ユナ」

「お前もな。おめでどう、キセラ」

……ぶっ、はははははは。

どちらからともなく皮肉っぽく笑い声をあげる2人。

中庭のベンチに座り、瓶のコーラとジンジャーエールで乾杯を上げる。

「何もめでたくねえわ。不正入学がよ」

「なら作戦成功祝いだ。これからは何だつてできるぞ」

人々の生活を脅かす敵性生物《グリム》。

そしてそれを狩ることを生業とする、世界の守護者《ハンター》。

ハンターを養成する施設である、ハイヴン・アカデミー。

アカデミー在学中にハンターの資格を得れば、世界中の様々な機関や人物にパイプができる。パイプができた大人たちの中には、「脇の甘い」ところもあるだろう。

そうすればー。

「あとはまあ、真面目にやるだけだ」

「ああ、《真面目》にな」

傾いた太陽は、濃い影を作る。

不意に、2人に影が落ちた。

「ねえ、君たちも新入生？」

声のした方を見ると、シルクハットにマントという、仰々しい格好をした少年が立っていた。

傍らには、ファウナスの少女が。

「……」

答えず、ユナカイトは視線だけ送る。

「さっき講義室で先生達と何してたんだよ。見てたぞ。事と次第によつては、ぼくは君たちを許さない」

始まりは、夕焼けだった。

呪わしいほどに美しい夕焼け。

こんな日には、決まって面倒が起きる。

「あー……、トイレの場所が分からなくなつてよ、先生に訊いてたんだよ」

「そんなわけあるかーっ！」

嘘つき。

ペテン師。

奇術師。

詐欺師。

そんな四人からなる、当代随一の問題児チーム（X U X A（シューシャ））。

その四人が、初めて顔を合わせた瞬間であった。

“ U X A | X e r a B a r s a m i c a ” | “ X

一面の白だった。

雪。空。雲。

その全ての白が視界を埋め尽くしていた。

彼女は、彼女が始まる前の記憶がある。

極寒の雪原に捨てられたのは、せめて死んだ後も腐らず綺麗なままでいられるようにと、両親のなけなしの慈悲だったのかもしれない。

吹雪と雪崩れに任せるとがままに雪原を転がり、彼女は目覚めた。

弱々しく立ち上がる。

方向も分からないが、自重に任せて足を動かす。

雪に足を取られて倒れる。

それを何千回か繰り返したあと、彼女は動かなくなつた。

何もわからぬ少女は、何者でもないまま消えようとしていた。

始まらないまま終わろうとしていた。

夜が来て、朝が来た。

半分雪に埋もれたまま、動かないまま、白い朝日を見つめる。

朝日は彼女の視界を登つていき、徐々に色を濁らせながら背後に沈んでいった。

少しずつ目の前の雪原が背後から赤く染められ始めていったとき、自分の眼前に長く

伸びる影を見た。

「父さん！ 手伝つて！ この子、まだ生きてる!!？」

知らない声がある。なにかを叫んでいるようだったが、彼女は言葉を教えられたことがないから、意味はわからない。

影が、自分に重なつた。

後ろから抱きかかえられ、強引に雪から掘り起こされた。

目の前にランタンの火がかざされる。

刺すような熱が、彼女の肌を炙る。

鈍くなっていた肌に、少しずつ感覚が戻っていき、熱さに身をよじる。

「俺は面倒は見ねえからな。お前が拾うたっていったから手伝ってやったんだ。世話は全部お前がやれ」

「……」

「聞こえてんのか！ 返事しろ、ユナカイト!!？」

「……わかったよ、父さん」

意味はわからないが、なにやら二人の人間が声を出し合っている。

この声は、嫌な感じだ。大きくて、こわい。

大きな声から逃れるように身をよじると、小さな手が彼女をかばうように抱きしめた。

その手の強さに呼応するように、彼女の目にマッチのように小さな光が灯った。目は開いていたが、いま初めて、彼女は眼前の光景を目にした。

夕焼けに照らされた赤い雪原。

さつきまで自分の視界を埋め尽くしていた、白ではない、赤。



果てない赤が広がっている。

血のような。

地獄のような。

朱砂のような。

それでも、彼女は綺麗だと思った。

綺麗だなんて感情も、その時、初めて覚えた。

始まりは夕焼けだった。

※※※

「あんまりキョロキョロしないでくださいよ、お嬢。まったく、恥ずかしい」

ベジヨータは主人——正確には、仕えている主人の娘に悪態をついた。

ミストラルの大商家であるウルアリアス家の一人娘だというのに、この頼りなさはどうなんだ。幼い頃からずっと見てきたが、この挙動不審は変わらない。

情けない……、そんな感情を隠しもしないベジヨタを見て、「お嬢」と呼ばれた少女は慌てる。

「ご、ごめんね、ベジヨタ……。こんなに沢山の人がいるの、初めてだから」  
ヘイヴン・アカデミーの大講堂。

入学式から何日かの講義や演習を経て、新入生はここに集められた。

300か、400か。様々な人種・種族の少年少女達がめいめい時間を過ごしていた。  
「はあ……、ゼオラ様はウルアリアス家の後継なんですよ？ あなたがそんなにオドオドしていると、お家の名にも傷が付くんです。そういうの、わかっただけで行動してます？」  
「……そうよね、ごめん、ごめんなさい、ベジヨタ。私、がんばるから」

そういうとゼオラは俯いて黙り込んでしまった。長身で、仕立ての良い服を着たゼオラがあからさまに暗くしていると、とにかく目立つ。

広い講堂の中であっても、良くも悪くも人の目を集めてしまう。

豊かなプラチナブロンドの輝きも、却って暗い表情を際立たせてしまっていた。

「だから、そういうのが……！」

苛立ちに耐えかねて、思わず大きな声が出る。

周りの奇異の視線を感じ、慌てて声をひそめる。

「……頑張っただけでどうにかなるなら、とっくにもっとちゃんとしていますよ。いいから、余計

に動き回らず、じつとしててください」

「……」

押し殺した声で 咤する。ゼオラの表情は、一層曇っていった。  
はあ。

ベジヨータは嘆息する。

ゼオラを上手いことサポートして、アカデミーでも良い成績を上げれば自分の評価も上がる。そうすればウルアリアス家での立場も、もっと強いものになるだろう。

そう思っていたのだが。

このお嬢様、思っていた以上に駄目だ。

学業も実技も決して悪くはないのだが、メンタルというか、決断力が無さすぎる。

メイドという立場である以上主人を立てるべきとはわかつているのだが、これでは立たせようもない。

このままでは何もできないままリタイアしかねない。

何とか、《残り二人》は優秀なのを捕まえないとな……。

このヘイヴン・アカデミーは、人類に仇なす敵性生物《グリム》を狩る《ハンター》を養成する機関である。

伝統的に《ハンター》は4人1組でチームを組み、行動することになっている。

入学式から数日。そろそろチーム分けの演習がある頃だ。

そこで優秀な二人と組むことができれば、この優柔不断なお嬢様をサポートしながらも、好成績を修められるはずだ。

品定めをするように辺りを見回していると、声をかけてくるものがあつた。

「やつほーお二人さん。あんた達って、もしかして入学前から知り合い？」

「……誰？」

ベジヨータは眉をひそめる。

声をかけてきたのは、とてもハンター志望とは思えない風体の少女だった。

とにかく派手。それが第一印象。

つば広帽子の下の白い髪には何色ものネオンカラーのメッシュ。

スレンダーな身体のラインがくつきりと出るタイトなトップスに、ひらひらのサイドスカート。

極め付けは底の厚いロングブーツ。

プロテクター付きのレザージャケットを着込んだ、実践的で無骨なベジヨータとは真逆のスタイルだ。

というか。

ハンターなめてんのかこいつ。

そう漏らしそうになったのを堪える。

が、表情までは殺せなかつたようだ。

「わお。怖い顔！ いやね、あたし、コイツと地元から出てきたんだけど、知り合い全然いなくつてさー。入学式からこつち、ゼーんぜん人と喋つてなくて。もうストレスでどーにかなりそーなの。ね、お喋りしよ？」

細くて長い腕でしきりにジエスチャーしながらまくし立てる。

コイツ、と示されたのは、この少女の後ろで佇む、陰鬱な雰囲気を纏つた背の高い少年だろうか。

「ほら、アリカ！ ここのみんな仲間になるんだから、アイサツしなきゃダメじゃん！」  
「うう、オレ、仲間とか要らないし……」

少女にばんばんと背中を叩かれた少年は怯えたそぶりで抗議の声を上げる。

目深に被つた黒いフードの下から長い前髪が。長い前髪の下には黄色いサングラスが覗く。

どれだけ人と顔を合わせたくないんだ、とベジヨタは訝る。

しかし、この二人は……

「あー！ つていうか、あたしもアイサツしてなかつたよね。ゴメンゴメン！ あたし、リフフローラ。長いから《リリ》つて呼んで。こつちの暗いのはアリカンテ。めんどく

さかったら《アリカ》でいいよ。地元はウインドパスのあたりなんだ」

「ウインドパス……?」

「そ。ずいぶんガラの悪い田舎なんだけどね。あんた達はアーガスとか? そつちの子、ずいぶんオシャレだもんね。髪もサラサラ……」

「——もう、いい?」

「え?」

ベジヨータの声音が変わる。不機嫌と敵対心をあらわにした声に、リリフローラの笑顔が凍りつく。

「いや、あたし達は、ただ」

「私たちは、アーガスのウルアリアス家。田舎者でも、資質がありそうなら話を聞いても、と思っただけど、その格好じゃハンターになる気も無さそうね。ふざけてるの?」

「おまえ……リリをバカにすんな!」

高圧的に言い放つベジヨータに、影のように控えていたアリカントが激昂する。

「ベジヨータ、やめて……! いい人たちなのに、こんな!」

「お嬢は黙っててください。それとも、貴女だけこの者たちとチームでも組みますか? 私無しでどうにかできるなら、どうぞご随意に」

「……………」

ゼオラは何か言いかえそうとしたが、飲み込んでしまう。  
飲み込んだ言葉たちが、涙になって目頭から溢れそうになったー

「よお、ずいぶん楽しそうじゃねえか。あたしも混ぜろよ。一年生同士、仲良くしようぜ？」

いつの間にか。

ベジョータとリリフローラの間に少女がいた。

長身の二人に挟まれて、ひどく小柄に見える。

「いやー、あたしもクチナシのほうから家出同然で出てきてよー。一人ぼっちだったから話し相手が欲しくって」

真っ赤なレザージャケットがてらてらと光る。リリフローラの服装とはまた違う、攻撃的な派手さがあった。

そんな風貌にベジョータは再び不信感を抱く。

「なに、あなたは」

「ルジェ・ワイルドベリー。ルジェでいいぜ」

「ワイルドベリーさん。あなたもハンター志望よね？」

「そうだよ。あたしン家は曾祖父さんの代からハンターなんだ」

「私とお嬢の《話し相手》になりたいのなら、その下品な言葉遣いからどうにかなさい」

「ああ？」

「身体もずいぶん小さいし、訓練も大して受けてないんでしょう。礼儀も資質もないなら、お呼びではないわ。お嬢の学友にはふさわしくない」

ルジェと名乗った少女は俯いて肩を震わせる。

リリフローラもゼオラも何か声を掛けようとしたが、それには及ばなかった。

彼女が笑っていたからだ。けだものじみた顔で。

「あー笑った。ホントにいるんだな。お前みたいなのやつ」

「何ですって……？」

「さっきから「お嬢」「お嬢」ってよー、何か人のため、みたいにしてっけどよー。全部

お前がお前の悪意で人を攻撃してるんじゃないかよ

「……違う」

「あたしはウソつきだけど、嫌いなモンはハッキリしてる。自分を良いやつに見せるためのウソだ」

「私はウソなんかつかない」

「そういうのだよ。お前は自分が正しいって大声で喚いて、そっちのお嬢様を自分の言



いなりにしたいんだろ？　今まで色んなロクデナシどもを見てきたが、正しきで自分以外のやつを奴隷みてえにしようって奴が、一番邪悪なんだよ。心底ヘドが出るぜ」

「私は……そんなことしない!!!」

ベジヨータが激昂した。怒りに任せて顔面に一発入れようと足を踏み出すが一歩できなかつた。

するり。

かしやん、かしやん。

ベジヨータの足元に、なにかの金具が転がる。

「だろーな。あんたが極悪人なら、そんなに可愛いパンツははかねえ」

いつのまにか、ベルトやらフアスナーやらがねじ切れたように壊れ、ベジヨータの履いていたシヨートパンツがずり下がっていた。

黒い無骨なレザー生地の中から、パステルカラーの布地が覗く。

「~~~~~っ!!」

褐色の顔を真っ赤にしてシヨートパンツを引き上げると、ベジヨータは走って何処かへ去っていった。

ゼオラも彼女を気遣うように、慌てて追いかけていく。

「ふん。あー、スツキリした」

そう言つて伸びをする彼女に、浮かない顔のリリフローラがおずおずと声をかける。

「えと、ルジエ、だっけ。その、ありがと」

「あ？ あたしはムカつくから言いたいこと言つてやつただけだよ。礼を言われる筋合いはねえ」

「はは、あたしもちよつとスツキリした。きようは珍しくツイてなかつたな。ああでも、そうでもないか。あんたみたいな子と知り合いになれた。よろしくね、ルジエ」

そう言つてリリフローラは手を差し出す。

しかし相手はその手を取らず。

「嘸み付いた。」

「うわあ？？」

「ははっ、やっぱあんた、今日はツイてねーよ。あたしみみたいなウソつきと会つちまつたんだからな」

「もおお、何？ 手えバタバタじゃない。あんたの地元の挨拶つて変わつてんだね、ルジエ」

アリカが素早く差し出したハンカチで手をぬぐいながら、リリフローラは半笑いだ。

「ぎやははは、ちげえよ」

「違う？ 挨拶じゃないの？」

「そこじゃねえよ。ルジエなんてやつはここにはいない」

「……は？」

「悪いな、あたしはウソつきなんだ」

「ええと、ちよつと待って。じゃあ、あんたは誰なの？」

「まあ、縁があつたらその時に名乗ってやるよ」

そう言うと、キセラ・バルサミカはにいいつと笑った。

※※※

「本つつつ当に……申し訳ございませんでした！」

ユナカイトが長身を折り曲げて深くこうべを垂れる。

大講堂の備え付けのトイレから出てきたのを見計らっていたかのようなタイミングで現れた長身の男子生徒に、ベジヨータは最初は面食らったが、やたらな低姿勢で謝り

倒す姿に一定の筋は見出したのか、しばらく話を聞いていた。

「あのウルアリアス家のご令嬢に無礼を働いた上に、偽名を名乗る始末……友人として深くお詫び申し上げます。どうか……どうか平にご容赦を……！このとおり、キセラも深く反省しておりますゆえ……」

「いててて、おいユナふざげんな。あたしは頭なんか下げねえからな」

「ぜんっぜん反省してるように見えないうんですけど。なんなのこれ」

キセラの頭を力づくで押さえつけ、なんとか謝罪のポーズを取らせようとするが、キセラは全力で抵抗する。

「……もういいわ、ええと、アバグネイル君。わ、私もだいぶ感情的になつてたし、その、みつともないところをお見せしてしまったから……お互い様です」

「ごによごによと語尾が弱くなっているところを見ると、ベジヨータもだいぶ気まずいようだ。」

「ご寛大な御心に感謝致します。さすが、ご高名なウルアリアス家の方は懐が広い。これは、お近づきの印です。どうか、受け取っては頂けませんか」

そう言うと、ユナカイトはベジヨータの前に跪き、なにかを差し出す。

「な、受け取れないわ、そんなもの。さつきも言ったでしょう。お互い様、だから……ひゃあっ!」

ユナカイトはそのまま立ち上がり、ベジヨータの鼻先近くに、自分の顔を近づける。突然の急接近に、ベジヨータはあからさまに狼狽えた。

「いえ。受け取って頂きたいのです。ウルアリアス家のご令嬢を守護せんとする貴女のその高潔な御心に胸を打たれた、僕の気持ちです」

「は、はわわわわ……ええええ、ええつと、そこまで言うのなら受け取ってあげてもいいけど……ど……」

目をぐるぐるさせながら頭から湯気を吹くベジヨータを見て、すこし可笑しそうにゼオラは微笑んでいた。

「あんたんとこの色黒メイド、あんな顔するんだな」

「ふふつ、ええ、わたしも初めて見ました。殿方が苦手なのは知ってましたけど」

もともと眉が下がり気味なためか、微笑んでもすこし翳のある表情。しかし声音はだいぶ明るいように聞こえた。

「その、さつきはありがとうございました。ルジェ……じゃなくて、キセラさん。わたしのことで怒っていただいて。本当はわたしもつとつかりしなきやいけないのに」

「全くだな。ましてやあんたはアイツの主人だろ？ 好きに言わせてんじゃねえよ」

「ベジヨータは、わたしを導こうとしてくれてるんです。ウルアリアス家の後継として、相応しいように。すこし言い方がキツいときもありますけど、わたしの為に言ってくれ

てるから……」

「は、どーだかね」

「わたし、頑張ります。ベジヨータに心配かけないくらい、正しくあれるように」

「正しく……ね」

キセラの眩きが聞こえなかったようで、ゼオラは小首を傾げている。

「何でもねえ。ユナ！ 行こうぜ。いかげん演習が始まる頃だろ」

キセラに促されると、ユナカイトはベジヨータに一礼してその場を離れていった。

ゼオラはそれを見送る。

「キセラさん……お友達になれるといいのだけれど」

「私は反対です。あんな野蛮な子。まあ、アバグネイル君は、見所ありそうでしたけど

……」

そう言ってユナカイトから受け取った包みを開けるベジヨータを見て、ゼオラはく

すつと笑う。

「ねえ、ベジヨータ。何を頂いたの？ 男の子からの贈り物だから、大切にしないとね」

包みを開けたベジヨータは、そのままの姿勢で固まっていた。

「……ベジヨータ？」

包みの中から出てきたのは、キセラが壊したのとよく似たデザインのベルトと。

「お嬢。前言撤回です。あの男……」

パステルカラーの、女物の——

「絶対に許さ——ん!!!」

※※※

「だから、何だって君は率先して揉め事を起こすんだよ。これから大事な演習だぞ？  
そんな生活態度じゃあ立派なハンターになれないぞ」

演習担当のエイズル・ヌウが壇上に上がって、注意事項などなどの説明を行う中、キセラに小言を並べているのは、同級生の星火（シンフォ）だった。

あの入学式の日、ユナカイト達とラステイ・ネイルの間に起きたことの一部始終を目撃していた少年。

新入生一同が大講堂に整列するとき、どういいうわけか連れれの少女と一緒にキセラ達の近くに陣取ってきたのだ。

「うるせえな、おチビ。エイズル先生のありがたいお話が聞こえないだろうが。あたしはこの演習に命かけてんだよ」

「いや、ウソだろそれ。っていうか身長！ 君もおんなじくらいだろう」

「あたしのが一センチ高え。これは本当。だからあたしはお前をおチビ呼ばわりする権利がある」

「ないよそんな権利は。人の身体的特徴をあげつらつてからかう権利は、この世界の誰にだってない。特に身長のことについては、絶対にだ」

「わかったよ、おチビ」

「だから！ 人の身長を！」

「[そのシルクハット君……、私の話が退屈なようだね。君が望むなら、このあと別室でとびきり刺激的な話をすることもできるが、どうかな？]」

壇上のエイズルが星火にしつかりと視線を向けて、口だけで微笑む。

あたりから聴こえるくすくす笑いに、星火は顔を真っ赤にして涙目だった。

「す、すいませんでした……先生」

エイズルはそのままの表情で頷くと、説明に戻った。



(……君のせいで怒られたじゃないか、バルサミカさん。つていうか君も先生の話聴いてなくていいのかよ)

(あー? あたしはもうアタマに入ってるし、演習内容)

(必要な資料は俺が事前に拝借してるからな)

と、ユナカイト。

(犯罪じゃないか!)

(つていうかよ、それを言うならお前の連れの女こそ、大丈夫なのかよ)

(いや、アマレットは静かにしてるだろ、ほら)

星火が自分の傍らを示す。豊かなシャンパンゴールドの髪と、狐のような大きな耳が目を惹くファウナスの少女が真っ直ぐな姿勢で微動だにせず立っていた。

(な? アマレットはちよつと変わった子だけど、行儀は心得てる。君らと違ってね)

ただし、目を閉じて。

(いや、寝てるだろこれ。ちよつとよだれ出てるし)

(アマレット! 寝ちゃダメだ! こんな良い姿勢で寝る人いる!?)

星火はハンカチを取り出し、アマレットの口角ちかくに一筋の光を放つ涎を拭き取ったり起こそうとしたりしたが、一瞬エイズルと目があったような気がして、慌てて姿勢を正した。

「以上で説明は終わりだ」

説明が終わってしまつた……星火は絶望的な顔で壇上を見上げる。

話が聞けなかつたことに、というより、どうやら事前に資料を盗み見ていたらしい、この学園不適合者に教えを請わなければならないということに対しての絶望であつた。

まあ、しかし。

背に腹は変えられない。

「それでは優秀なる未来のハンター諸君、この場では解散とする。さきほど示された部屋にそれぞれ向かい、各々の課題をクリアー」

「な、なあ、バルサミカさん、アバグネイル君、さつき言つてた資料だけど、良かったらー」

その後は言えなかつた。

星火は言えなかつたし、キセラは聞けなかつた。

爆音。

大講堂の壁面が突如として崩れ、巨大なイノシシのようなグリムが現れたからだ。

高さだけでも人間の3倍強はあろうか。

長い牙で壁を突き崩し、講堂の中央で急制動を掛けたため、瓦礫と粉塵が舞う。

方々で悲鳴と、逃げ惑う足音が響く。

あるものは恐怖で座り込み、あるものは無我夢中で逃げる。

大講堂の入り口は全て閉鎖されていたが、どういうわけか鍵も開かなくなっていた。

半狂乱の新入生達がそれぞれの扉の近くで喚き叫んでいた。

そんな中で。

「めんどくせえ。やるか」

「まだ本調子じゃあないんだがな。仕方ない」

「怪我人を出さないようにしないとね」

「……ふあ。シン、おはよ」

四人が大講堂の真ん中に残っていた。

四人が戦闘態勢に入っていた（約1名を除く）。

キセラが手にしたアタッシユケースのようなものから、巨大な刃が現れる。

ユナカイトの機械仕掛けのブーツの各所が展開し、唸りを上げる。

星火の傍らには、棺桶のような箱が飛来する。

アマレットは、後ろに組んだ手に密かに鉄扇を握る。

「あたしらはチームでも何でもねえ。めいめいテキトーに仕掛けるぞ。エラーが出たら、そんな時動けそーな奴がテキトーにフォローに回る。ふん、できねえ奴はいるか？」

「答える必要が？」

心底面倒臭そうに号令を出すキセラを、星火はとぼけたような顔で茶化す。

「……ねえな！」

四つの影が、グリムの巨体に飛びかかっていた。

※※※

見ると、キセラ達以外にも戦意を持った新入生が居たようだ。

顔に入れ墨の入ったファウナスの少年や、センブランスなのか景色に溶けるように姿を消しながら移動する少女、巨大なガントレットを構える少女を守るように立ち回る少年。

さつき顔を合わせたゼオラやリフロラの姿も見える。

それぞれのグループはよく連携を取っているが、しかし。

「ああクソ、逃げ回ってる奴らが邪魔で仕方ねえ！ すっげえイライラするぜ」

巨体ながら俊敏に動き回るグリムのせいで、カバーしなければならぬ範囲が広がる。

猪型のグリムマー巨大な、通称《ポーバタスク》は近くの生徒を一人ずつランダムに狙って追いかけるという行動パターンのようなのだ。

あっちの少女に近づいては近くの者たちが逃げ惑い、こっちの少年に迫っては周辺の生徒たちが逃げ回る。

「バルサミカさん、僕の武器は遠距離がメインだ。これじゃ射線が通らない。どうする？」

「あたしの能力も、こーいうデカブツ相手だと大雑把な戦法しか取れねえ。逃げてるザコどももまとめてぶっ殺していいならやれるが」

「ダメ！ 絶対！」

「んじゃあどーすんだよ。お前が人払いでもしてくれんのか」

「人払いね……ふむ」

阿鼻叫喚の生徒たちを見て、星火はにやりと微笑む。

「人払いは出来ないけど、人目を集めるのは得意さ。奇術師なんでね。……アマレットを頼むよ！」

そう言うのと、錐揉み回転をしながら高く飛び上がる。

星火の武器である巨大な棺桶状の箱も彼を追いかけるように飛ぶ。

浮いたまま地面と垂直な姿勢でびたりと静止した棺桶に、星火は軽やかに一本足で着地した。

「こういうのは、第一印象が大事さ」

大きな火花が飛ぶ。

とともに、星火の足元から、フットライトじみた派手な光が照射される。

棺桶から無数の機械仕掛けの鳩が飛び出し、星火を取り囲む。

フットライトがあちこちに光線の向きを変えると、機械の鳩に反射し、きらきらと輝いた。

緊急事態の中、急に始まった謎の出し物に、逃げ惑っていた生徒たちは呆気にとられていた。

が。

「呆気にとられる」ことで、さつきまででんでんばらばらだった生徒たちの視線は、ただ一箇所に集められていた。

「御機嫌よう生徒諸君！ 急に演習が始まったものだね。いやあ先生方も意地が悪い。これから《演習の本番》だと言うのに、こんな大層な《前座》を用意してくるなんて。そう思わないかい！」

この巨大グリムは前座。このあと演習の本番がある。

巨大グリムが出現する直前、ユナカイトから研修の情報を得ていたのだ。

《大講堂での説明のあと、新入生は指定された部屋に移動。ただしその前に、小規模な適性試験を行う》と。

小規模って。

急に降って湧いてきた新情報に、星火を見上げる生徒たちに動揺が走る。

なんであいつはそんなことを知っているんだ、あいつも先生たちとグルなんじゃないか、など、口々に漏らすのが聴こえる。どころか、却って混乱し、各々の判断でその場から逃げ出す生徒もいる始末だった。

(うむむ、ちよつと合わなかったかな……?)

思ったより生徒達の混乱が強い。しかし彼らが落ち着くのを待っている時間はない。

気を取り直し、芝居掛かった大音声でパフォーマンスを続ける。

「諸君、自己紹介が遅れたね。僕は星火・ジャスパー。その名も高きゲツコー・ジャスパーの血を引く、奇術師だ」

こんな時に何言ってるんだ。お前のせいでグリムがこつちに來たらどうしてくれる。

そんな声が聞こえる。

「突然だが、ここで一つ奇術をご覧に入れよう。まあ、いわゆる《消失マジック》って奴

だ

引つ込め。お前もグリムと戦つてこい。

生徒達の苛立ちが募る。

誰かの放つた飲み物のボトルが、星火の右頬を掠めた。

※※※

「ちつとやべえんじゃねえのか、アレ」

キセラはグリムを誘導しながら星火を見遣つた。思つたより荷が勝つか。

とよぎつたその時、後方で避難してははずのアレットが、ふらふらと星火のいるほうに歩いていくのが見えた。

「あ、おい！ どこいく気だ！」

星火が誘導しようとしている生徒たちと一緒に避難するつもりなのか。

しかしあんな足取りでは、グリムに捕まる。

「ちつ、手の掛かる。おいユナ！ 援護しろ！」

「分かつてる！」

ユナカイトのブーツの脛あたりからダスト弾がばらまかれる。

それに気を取られたグリムの脇腹を、キセラが切りつける。



鈍い弾力。鋭利な刃も通った感触がない。

「くそお、かっつてえー！」

しかし、注意を引くことには成功したようだ。グリムはキセラ達に釘付けになつてい  
る。

アマレットに襲いかかる心配は、当面なさそうだった。

しかし、当のアマレットの姿は、星火の方に向かう生徒たちに紛れて見えなくなつて  
いた。

「……ん？」

キセラは訝る。

星火の方に向かう生徒たち？

先程まで無秩序に逃げ惑つていた生徒たちは、気づけば星火が孤軍奮闘する辺りを目  
指して一様に歩をすすめていた。

星火のパフォーマンスに、あの恐慌を収めるほどの力があつたのだろうか。

なんだかよくわかんねえが、結果オーライか。

生徒たちが一箇所に集められたことで、グリム周辺は広い空間が空いていた。

キセラはけだものじみた笑みを浮かべると、身体を巡る自らのオーラに意識を向け  
た。

※※※

何がきっかけだったのかはわからないが、恐慌状態にあった生徒たちは、無事自分のところに集まってくれていたようだ。

人を集める、とりあえずのミッシェンは達成といったところか。

ボトルが掠めたおかげで少しひりひりする頬をさすりながら、星火は笑みを浮かべる。

「さあ、消失マジックの始まりだ！　ただし、消えてみるのは——諸君の方だけどね！」  
 身体の中のオーラを解き放つ。

薄く、広く、延ばすイメージ。

放出されたオーラは、集まった生徒たちを覆う、ボールのような形を取った。

あれ、これ、鏡……？

自分たちの姿を文字通り鏡写しにするオーラの幕を見て、生徒たちが驚きの声を上げる。

星火の固有の特殊技能——《センプランス》は、鏡面。

目の前のものを鏡写しにする特性を持った幕を自在に張ることのできる能力であった。

幕の内側にいる生徒たちは自分の姿を見、一方のグリムには——

「みんなの前に鏡を張った。これであの愚かなグリムには、諸君らの姿を見ることはできないってわけさ。これにて消失マジック、プレステイツジだ」

生徒たちが安堵の声と歓声を上げる。

途中から妙に生徒たちが素直に誘導に従ってくれたのはラッキーだったが、自分の力だけでこの場を収められたとは思えない。

安心した表情の生徒たちの中に、アマレットの姿も見えた。

状況がわかっているのかいないのか、眠そうにあくびをしている。

僕の方だけでは、この子も守れなかったかもしれない。

複雑な心境ではあったが、目の前の観客たちに、星火は恭しくお辞儀をしてみせた。僕の仕事はここまで。

さあ、あとは上手くやってくれよ。

※※※

キセラの能力——《センブランス》は、至ってシンプルなものであった。

物体を《裏返す》能力。

伏せられたカードを表向きにすることもできるし、Tシャツを洗濯するとき裏返し

にすることだってできる。少し力は使うが、先日襲いかかってきたブレイブブルにしたように、相手の着ている鎧のような硬いものもひしやげさせることも可能だ。

使い勝手がいいような悪いような。

その能力をキセラは今、

「ははは、久しぶりの大仕事だぜ」

大講堂全体に対して使おうとしていた。

床板に両手をつき、ありったけのオーラを注ぎ込む。

身体の表面から紅色の光が溢れる。

床板一枚を裏返すのではなく、大講堂という容れ物ひとつを丸ごと。

裏返す。

ひっくり返す。

そんなイメージで。

めき……

建物全体が僅かに軋む。

天井が戦慄き、ぱらぱらと埃やら粉塵やらが降ってくる。

その様に、グリムに応戦していた他の生徒たちも困惑する。

まだだ。

もつと空間全体に意識を行き渡らせないと。

更に力を込める。

木造混じりの建築であるから、もつと楽にひっくり返せるかと思つたが、流石に大きすぎる。

まだだ。

まだだー

そう思つた時、キセラは口中に血の味を感じた。

オーラの過剰な放出に、彼女の矮躯が耐えられなくなつてきたのだ。

「キセラ!!?」 範囲を絞れ! 持たねえぞ!!?」

遠くからユナカイトの叱咤が聴こえる。

はは、ガラにも無く心配してんじゃねえよ、と鼻血を素手で拭い、嗤う。

そうだな。今のあたしにやあ流石に無理か。

呼吸を整え、再度、講堂に張り巡らせた自分のオーラに意識を向ける。

範囲を絞る。研ぎ澄ませる。

水面に波紋が広がるのを、逆再生するイメージ。

グリムの巨体を囲むようにオーラが集まったとき、ぴいん、と水の入ったグラスを弾いたような音が聴こえた気がした。

今だ。

「おおおおおらあああああああああ！」

キセラが吼えた。

何かが裂けた音が響いた。

グリムの足元の床が内側に向かって湾曲していく。

歪ませる力に耐えきれなかった建材がひび割れ、裂け、花卉が閉じるようにグリムを捕らえた。

グリムが低く轟く声で悲鳴をあげる。

脱出しようと身をよじるが、歪曲し続ける建材がその巨体にめり込み、動きを封じていく。

めり込んだ建材が骨にまで達した頃、グリムは完全に身動きが取れなくなった。ささて。

「整ったぜ！ てめえら、ぶちかませ!!」

大音声に弾かれたように、戦闘態勢にあった生徒たちが一齐に突撃していく。

めいめいが持てる戦闘技術を尽くして、センブランスを駆使して、攻撃を叩き込む。勇ましき少年少女たちの鬨の声がコーラスのように。

武器の接触音が打楽器のように。

グリムの唸り声がベースのように。

響き渡る。

無数の稲妻が交差するかのとき、若き戦士たちの全力を尽くした戦闘風景の中、キセラは鼻歌を歌いながら悠然とした足取りでグリムに向かう。

途中、取り落としたアタッシュケース型の武器《パ lind ドローム》を拾う。

《パ lind ドローム》はアタッシュケースのように見えるが、その中にいくつもの武装を隠している。

持ち手のボタンを操作すれば、あるいは、キセラがセンブランスで《裏返せば》、忽ちその裡から刃や銃砲が現れる。

その動作を確認するかのように、仕込まれた武器を出したり引つ込めたり、繰り返す。やがて、キセラはグリムのすぐ近くまでたどり着いた。

鼻歌を止めた。

「よお、やってるな。あたしも混ぜろよ」

誰にともなく、言う。

そして、嗤う。けだものじみた表情で。

瞬間、《パ lind ドローム》の内側が回転し、バズーカの砲身が現れた。

轟音。

巨大なダスト弾頭がグリムに接触するや、爆発した。その反動でキセラは上空に飛び上がる。

天地逆の姿勢になる。

バズーカ砲の砲身が内側に回転すると、今度は機関銃のバレルが現れる。

連続する射撃音。

グリムの分厚い皮膚に雨のようにダスト弾が降り注ぐ。

空中のキセラは身体を回転させ、落下する。

《パリンドローム》から、幅広の刃が出現した。

それをそのまま真下に向け。

落下の勢いそのままー

グリムの頭部に突き立てた。

狂ったように叫び出すグリム。

その頭頂部に深々と刃を突き刺したまま、身をよじる。

キセラは振り落とされそうになるが、《パリンドローム》の持ち手を強く握り、耐える。

こゝも深々と刃身が刺さった状態では、《パリンドローム》の兵装の入れ替えは難しい。

しかしキセラは逆に、自らの《裏返す》能力を、最大出力で《パリンドローム》に込



めた。

各所のパーツの隙間から、紅色の光が漏れ出す。

キセラのオーラに突き動かされ、内部の兵装がめちやくちやに動き回った。

刃はバズソーのように回転し、グリムの頭骨を抉る。

バズーカの砲身から、残った弾頭が全てグリムの体内めがけて発射される。

機関銃はけたたましく唸りを上げ、小さな弾丸を吐き出す。

火炎放射器が中からグリムの巨体を焚く。

切る。抉る。撃ち抜く。燃やす。焦がす。

穿つ。混ぜる。叩く。砕く。潰す。

《裏返り》続け、回転し続ける《パ lindローム》が、およそ考えられる暴力の全てを叩き込んだ時。

グリムの巨体は崩れ去り、

黒っぽい煙のようなものになって、

消えた。

※※※

その日の全演習が終了した。

巨大グリム撃退後、解錠された大講堂から出た新入生たちは、めいめい指定された部屋でそれぞれの課題をこなし、そこで見られた適正を元に、四人ずつ呼び出される。

そして今、壇上には。

キセラ・バルサミカ。

ユナカイト・アバグネイル。

星火・ジャスパー。

アマレット・D・K。

その四人が立っていた。

「……で？ エイズル先生。この四人で、チームなのか？ まあ、ユナと組むのは問題ねえが」

「いやいや、冗談じゃないぞ、バルサミカさん！ たしかに一瞬連携をとったけども、僕は君たちみたいな社会不適合者とは組まないからな！」

「なんだよジャスパークン、お前とは一目会った時から運命感じてたのによ。傷つくぜ」  
「だからウソだろそれは！」

そんな楽しげな会話を、

「……もう、喋っていいかい？」

エイズル・ヌウの穏やかな声が遮った。

「け、結構です……」

星火はまた涙目だった。

「確かに君たちは、アカデミーの生徒として、模範的とは言い難い。しかし、迷いなく戦闘態勢に入った、危機に対して怯まない心、咄嗟に奇策を講じる柔軟さ。そのどれもが、迫り来る死をくぐり抜ける、ハンターとしての力になるだろう。君たちならではの力を、このアカデミーで磨いていってくれ」

エイズルは穏やかな、しかし力強い言葉でキセラたちを激励する。

星火は目を潤ませながらその言葉を胸に刻んでいた。

「はは、ありがとよ、先生。この四人で組むことに異論はねえよ。面白そうだ」

「僕は絶対に嫌だけどな」

「でもよ、一個質問だ。チームの名前つてのは、色に因んだ呼び方にするのが習わしだろ？ あたしのイニシャルは“X”だし、こっちのおチビも“X”ときた。どの学校にも、結構なこじつけみてえな呼び方のチームがあるのは知ってるけどよ、あたしらは流星石に、無理じゃねえか？」

この世界——レムナントでは、過去の災厄から、人々は各々の個性の表現を妨害せしめんとする者への抵抗の証として、決して奪われない個性——色を、個人やチームの名

前に織り込む慣習がある。

色は、個人や集団の在りようを表す、祈りの言葉でもある。

“X”。

頭文字になることの極めて少ない文字。

始まることを拒否するような。

決して始まらないような文字。

キセラ・バルサミカと星火・ジャスパール、ふたりの“X”を擁する、このチームの在りようは、いかなるものか。

「朱砂」

「シュー……シヤ？」

聞きなれない響きに、キセラは眉をひそめる。

「X—U—X—Aで、シューシヤ。朱砂。ミストラルの辺境に伝わる古い言葉で、赤い鉱石を指すそうだ。我々のダスト技術が発達するより昔、化学の前段階の技術体系でも重用された。《賢者の石》とも呼ばれていた。未知の化学反応を起こすかもしれない君たちに、相応しい名前だと思うが」

「はは、赤か。悪くねえ」

キセラは少し楽しそうに笑うと、今しがたチームメイトとなった三人を振り返る。ユナカイトは面倒臭そうに他所を向く。

星火は困り果てたように天を仰ぐ。

アマレットは眠たそうに視線をふらつかせる。

見事に全員違う方向を向いている様に呆れるが、キセラはそれでいいと思った。

「まあ、よろしく頼むぜ」

嘘つき。

ペテン師。

奇術師。

詐欺師。

そんな四人からなる、当代随一の問題児チームへXUXA（シューシャ）。

結成の瞬間であった。

朱砂。

赤い色。

それはアマレットの瞳によく似た色であった。

その目は捉えていた。

彼女を射抜こうとする視線を。

如何なる光も逃げ出せないような深い黒。

影そのもののような気配の視線。

アマレットに向って、

エイズル・ヌウが微笑みかけた。

ep. 4 Amaretto D. K. —  
 “ A ” — X U X

コンピュータの画面に、ひとつの単語と、ひとつの画像が表示される。

「ポジティブな単語」か、「ネガティブな単語」のいずれかと。

「人間の顔の画像」か、「ファウナスの顔の画像」のいずれか。

被験者はそれぞれ100種以上からランダムな組み合わせで次々現れるそれらを制限時間内に覚え、実際に表示されたものがどれであったか、回答する。

そんなテストがある。

このテストで分かるのは、被験者が「どの属性の組み合わせをもっともよく覚えることができていたか」であり、それによって被験者の心理的な傾向が類推される。

潜在的に、どの人種に対してポジティブ、あるいはネガティブな印象を持っているか。人間、あるいはファウナスに対して、どのように差別意識を持っているか。

このテストの目的は、差別意識を持った者をあぶり出し、糾弾することではない。大なり小なりあらゆる知性に存在する、差別意識を発見し、被験者それぞれに自覚させることである。

今もこの世界——《レムナント》に残る、人間によるファウナス差別。あるいは、その逆も。

二つの人種の対立構造という世界規模の課題をクリアするためには、「誰もが差別をしよう」と理解し、受け入れるところから始めなければならない、という逆説的な観点から提案されたテストであった。

ライオンのファウナスであるレオナルド・ライオンハートが学長を務めるヘイヴン・アカデミーでは教員採用に率先してこのテストを導入し、来たるべき差別のない世界のために必要な人材を集めていた。

「すごいですね。あなた、このテストの組み合わせをすべて暗記しているんじゃないんですか？」

「いえ……このテスト形式もいま始めて知ったくらいですよ」

試験官は、提出された回答用紙を見て目を丸くする。

正答率こそ人並みではあったが、そこから導かれる傾向は——。



「こんな結果が出るのは、他者にかけるも興味のない人くらいですよ。あるいはー」

完璧な聖人とかね、と試験官は冗談めかした。

※※※

「ううう、ショックだ……全世界を奇術で笑顔にするべきこの僕が、潜在的にファウナス差別の意識を持つていたなんて。ごめんよアマレット、そんな意識を持つていたことの償いとして、僕が君を守るからね」

戻ってきた結果表を手にしたまま、机に突っ伏す星火は哀れっぽい声をあげるのを、右隣の席のユナカイトは一瞥もしない。

「寝てるがな、当の狐女は」

アマレットは星火の左隣で、まっすぐ背筋を伸ばしたまま寝息を立てていた。

「うるさいな！　っていうか意外だな、ユナカイト。君は逆に人間に対して悪印象を持つている、っていう分析結果なんだ」

「まあ、ガキの頃から周りにいたのは売られてきたファウナスが多かったからな。悪どいすることをするのは、決まって人間の方だった。俺の父親とかな」

「君も苦勞してきてるんだな。まあ、相棒があんなじゃや馬だから、想像はつくけど」  
出力された結果表をひらひらとはためかせ、制服を着崩したキセラがニヤニヤしながら席に戻ってきた。

「どうだった？ キセラ」

「おめー、あんまり人のこういうのに興味持つなよな。デリカシーねえのはモテねーぞ」  
そう言つて結果表をユナカイト越しに星火に放り投げる。どれどれ、と星火が眺める。

「うわあ。ネガティブな言葉が絡む方の正答率が九割以上……種族による偏りはほぼないって分析だけど、なんか他の問題が表出しそうな結果だね」

「あー？ うるせえよおチビ。差別意識のない人格者のあたしの前にひれ伏せや」

そんな他愛のない会話を、講義室の中央のエイズル・ヌウの声が遮った。

「さて、チームZBLAの面々がテストを終えたところで、全員分に結果は行き渡つたよ  
うだね」

キセラが見やると、隅の方の席でゼオラ・ウルアリアスが結果表を見つめながら難しい顔をしていた。ゼオラ達が組んだチームは《ZBLA（ゼブラ）》という名らしい。

エイズルは続ける。

「差別のない世界というのは、究極的なところ、《差別心を持つていようが、差別的言動

を絶対に行わない世界」というところに帰結すると、私は思っている。個々人の心から差別感情を取り除くべし、という論調も市井では観測できるが、これは現実的とは言い難い。また、個々人の心のありようまで社会が制限してしまうことも、これは望ましいことではない。

ゆえに、我々が考えていくべきなのは、各々の心にある差別意識を受け入れ、自分自身で観察し、行動に反映させないことなのだ。強い理性を持つてね。

強い理性というのはーキセラ・バルサミカくん」

突然、キセラが名指しされた。

「……あー？」

「君の乱暴な言葉遣いや粗野な素行。初めて君を見る人は、君に理性を感じるだろうか」  
「まあ、ねえだろうな」

「そう想像できるね。しかし、自らの振る舞いに自覚的であるという、理性をもっているというところに、君と何回か会った人物は気づくだろう」

（自覚的に悪いことしてるのって、却って最悪なんじゃないか？）

（コイツが最悪なのは知ってるだろう）

星火とユナカイトがヒソヒソ話をしている。

「そんな理性をもったバルサミカ君に問おう。」

君のチームには、一人だけファウナスのメンバーがいるね。アマレット君がファウナスであるということも理由に、不当な暴力や不利益を被っているのを目の当たりにした時、君ならどうする？」

「そんなのゴイツの問題だろ。気に食わなけりや、気にくわないと思つたやつがどうかすべきだ。あたしは何もしねえよ」

キセラは良い姿勢で眠るアマレットを指し、即答する。

ともすればその場にいるファウナス全員から反感を買うようなことを当然のように答えるキセラに、しかしエイズルは深い笑みを返して大きく首肯する。

「素晴らしい。チームメイトという仲間に対していささか冷淡な印象はあるが、私も、それが最も《差別的でない》解答だと思うよ。あくまで個人の問題と捉えるという点ではね。

むろん、差別的な言動は批難されて然るべきだが、《被害を受けているのがファウナスであることを理由に動く》ことも、それは差別的行為と呼ばれるものではないかと思つている。議論の余地はあるがね。

差別主義者をあぶり出して糾弾する。あるいは抹殺する。いわゆる《反差別》とよばれる思考様式も、不変の正義のように聞こえはするが、その形はよく考えると、差別と線対称なだけで形はよく似ている、と私は考える。

バルサミカ君のように、種族を問わずあくまで個人であると捉えて価値を判断するという思考は、おそらくこれからの時代に必要なようになってくる。一見冷たく見えるかもしれないが、それでいてフェアで、合理的でもある」

「だとよ、キセラ。先生に褒められてよかったな」

「気持ち悪い」

「繰り返すが、撲滅すべきは、差別的な《言動》だ。内心は自由と言ったが、私は君たちにもそのように考えてほしいと思うし、私の目の届く範囲で差別的な言動を許すつもりもない。種族を問わず個人として他者と関わり、世界と関わってほしい。」

さあ、冒頭のテストと、今の話を踏まえて、今日のファウナス史の講義を始めよう。テストを開いてくれ。最初はー」

※※※

板書を書き写し、自分なりに考えた要点をノートにまとめたところで、星火は隣を見遣った。

講義が終わって15分くらいだろうか。もう講義室には星火とアマレットしか残っていないなかった（キセラとユナカイトは授業が終わった瞬間に教室からいなくなっていた）。

アマレットは姿勢を崩し、自分の腕に頬をのせて眠っている。夢を見ているのか、首を少し動かすと、ピンクゴールドの柔らかそうな髪が顔にかかった。

「……」

星火はそつとアマレットの髪に触れる。

顔にかかる髪のひとふさをよけようとした。赤ん坊にさわるように、おずおずと。指先が、白い頬に触れた。

血管まで見えるような透明な肌は、水晶のように滑らかであった。

「ん……」

アマレットが少し声を漏らす。

星火の心臓が逆向きに跳ねた。

そのまま重低音の鼓動を叩き続ける。

あまりにも可憐で、あまりにも無防備な。

触れていた中指が何かを少しためらった。

数秒、逡巡したあと、小指と薬指が、恐る恐るアマレットの頬を撫でた。

「本当に綺麗なんだな。アマレットは」

思わず口にした言葉に、星火はひどく恥ずかしくなり、慌てて手を引つ込めた。



「……おチビ、おめー、割とガチか、これ」

頭をポンポンと叩くキセラに、消え入りそうな声で答える。

「うん……好きになっちゃった……」

アマレットは眠ったままだった。

※※※

・デートに誘われた回数：99件  
・ラブレターを貰った件数：紙のもの：43件　メッセージアプリ：107件  
・貰ったプレゼント総額：約2300リエン相当（ハイヴン・アカデミー一般職員の月給とほぼ同額）

「……ユナカイト。君が情報集めに長けているのはこの一週間でよく分かったつもりだったけど、何でこんなデータまで持つてるの」

アカデミー中庭のベンチに腰掛けながら、星火はチームメイトの異様な情報収集能力



に舌を巻いていた。巻きすぎて、やや気持ち悪くなっていた。

アマレットは、少し離れた向かいのベンチにちよこんと座って、サンドイッチを少しずつ食べている（星火が買った）。

「情報は武器だ。学内でうまく立ち回るためにも、データは細大漏らさず持つておかないとな」

「漏らさなすぎだろ……どうやってるんだよもはや」

「いやーしかしこの狐女、モツテモテだな。おいどーすんだ星火・ジャスパークンよ。早いとこモノにしねえと、どっかのイケメンに持つてかれちまうぞ」

「ううう、違う、アマレットはそんな軽率に知らない人に心を許すような子じゃあない！」

「いや、そんなに知らねえだろこいつのこと」

「うっ……」

痛いところを突かれて星火は絶句する。

確かに、この学校の中で入学前からアマレットを知っているのは星火だけだったが、それも入学式直前に洋上で助けただけで、特にこれといった会話があったわけでもなかった。

というか、アマレットは基本的に寝てるか食べてるかだけなので、密度の高いコミュ

ニケーションに成功した記憶も、星火には無かった。

「なのに、なんで好きになっちゃったんだろ……」

星火は顔を赤らめながら頭を抱える。

「顔だろ」

「顔だな」

「あと身体」

「だろうな」

「大怪我しろよ君たち」

そんな和気藹々とした会話をしていると、向かいのベンチのアマレットに近づくものがあつた。

??ケース1. 見知らぬ上級生①

上級生だろうか。

何やら高級そうな小さな紙袋をアマレットに差し出した。

「お、何だアレ。高えブランドの袋じゃねえの」

「小さいと却って高い物に見えるよね」

アマレットは不思議そうな顔をしていたが、やがてにこりと笑うとその包みを受け

取った。

「おいおい、受け取っちゃったよ。どうすんだアレ」

「え、何、指輪とか？ 嘘だろアマレット」

見知らぬ上級生①は何かを必死で訴えかけている。

ジェスチャーを駆使し、何かをアマレットに求めているようだったが、どうやら何も伝わっていないようだ。

アマレットはただただニコニコしている。

そのうち上級生は土下座をはじめた。一度や二度ではなく、もはや何かのトレーニグのような様相を呈し始めていた。

「ぎやははは、ああいう虫みてえだな」

「先輩に酷いこと言うなよ、君」

「プレゼントは手放さないな」

長い土下座の末、彼は何かを諦めたように、しよぼくれた姿勢で去っていった。

??ケース2. アカデミー事務員

受け取った紙袋を膝の上に乗せているアマレットに、また誰かが近づいてきた。

すらりとした長身だが、姿勢の悪さと覇気のない表情から、どことなく頼りなさがない

じみ出ている。

「あれ、ユナ。あいつ、見た顔だな」

「……ハーベイ・ウオールバンガーだな。事務員の」

「ああ、入学式の時に窓口やってたクソ野郎か」

「窓口やってただけでクソ野郎呼ばわりされるの!?!?」

ハーベイはフラフラと歩き、アマレットの前を通り過ぎた。

「通り過ぎちゃった。流石に学校の職員の人は生徒に手は出さないか」

「いや……何か落としたぞ」

よく見ると、黒い革でできた何かが、アマレットの目の前に転がっていた。

「財布かな」

「財布だな」

ハーベイはそれに気づかずどこかへ行こうとしてしまう。

「まずくないか。僕ちよつと拾ってくるー」

「待てよおチビ、よく見ろ」

歩き続けるかと思われたハーベイはだんだん速度を落としていた。

どころか、後ろをチラチラと気にしている。

「ぎゃはは、あんな手使うやつホントにいたのかよ」

「え、どういふこと?」

「アレを拾わせて、それで接点を持つてことだろう」

「せ、せい……」

アマレットは落ちた財布に一向に興味を示さない。

やや離れたところにいるハーベイは、完全に歩くのをやめてアマレットの方を向いていた。

少し静止したあと、早足でベンチの前まで移動する。

財布を早い動作で拾い上げると、何かをアマレットにまくし立てる。

しかしアマレットは不思議そうな顔でハーベイを見るばかりで、恐らく何も伝わっていなかった。

大げさなため息をつくような動作をしたハーベイは、何を思ったか財布をアマレットに手渡すと、また歩き出した。

「え、何?」

「あー、ひよつとしてアレか、財布を拾って声を掛けて、つていうシチュエーションをやり直そうとしてるのか」

「何のために……?」

「あの年ごろの男にも、いろいろあるんだろうな」

数メートル歩いたところで立ち止まり、また早足でアマレットのもとに向かう。

また何やら喚いているようだったが、アマレットはまだ不思議そうな顔をするばかり。

「……《俺が歩き出したら呼び止めて、落としましたよ、つて言ってくれ》つて言ってるみてーだな」

「なんて無駄な読唇術の使い方だろうね」

コミュニケーションの成立に絶望したのか、また大きなため息をつくとき、財布を取り上げようとする。

しかしアマレットは両手に握ったまま離さない。

「手放さないな」

「なんだろう、だんだんあの人可哀想になってきた」

やがてハーベイは何秒かうなだれると、そのままの姿勢でどこかに去っていった。

??ケース3　ケース16。　省略

アマレットの座るベンチには、いつのまにか包みやら紙袋やらの山ができていた。

すべて、誰かからもらった貢物の品々であった。

「飽きねえなー、この昼休み」

「ここまで来ると凄いとしか表現できんな」

「うううう、どいつもこいつもアマレットに気安く近づいて……!」

アマレットの周りを凝視し続けた星火の両目が充血で真っ赤になり始めた頃、アマレットの前に大きな影が近づいた。

??ケース17. 見知らぬ上級生⑨

「ワオ。今年の新入生にずいぶん可愛い子がいるって聞いてたけど、君のこと?」

「……?」

アマレットが見上げたのは、長身の上級生だった。

背が高いだけでなく、屈強そうな巨体。

「キレーな髪だね。金髪。俺とお揃いだ」

無遠慮にアマレットの髪に触る。

「はは、すげえな。この周りにあんの、全部プレゼント? たっけえ店のぼつかりだな」

そう言いながら、ベンチの上を足で乱暴になぎ払う。

ばさばさと音を立てて、贈り物の数々が地面に散らばった。

そうして強引にベンチのスペースを空けると、どかつとアマレットのすぐ隣に腰掛けた。

アマレットは驚いた風でもなく、ぼんやりと上級生を見つめる。

上級生は太い筋肉質な腕をアマレットの頭に回すと、髪の上から生える大きな狐の耳を弄ぶ。そのまますると手を下のほうに移すと、脇腹のあたりを親指で、つつつ、となぞった。

「……君、マジで可愛いよね。お腹んとこのタトウも、すげえクールだ。太ももまで入ってんだね。ねえ、これ、全部見たい」

「うおおおおお！ ストップ！ ストーーーーーッブ!!!」

彼の指がアマレットのショートパンツと肌の間を滑り込みそうになった時、鬼の形相の星火が上級生に飛びかかった。

ドロップキック。

しかし小柄な星火の全体重は、目の前の金髪的美丈夫にはまったく通用しなかった。

「……は？ なにお前」

さつきまで穏やかな顔をしていた上級生の眼から光が消え、氷のような視線を放つ。「先輩！ なんでしようけど！ うちのチームメイトに手出ししないで下さい!!!」

「ははは、おもしろー。ちっちゃええのに凄え吠えんじゃん」

おもしろー、とは言うが、まったく目が笑っていない。

「……どうする、流星に止めるか？」



「ぎゃはは、いいんじゃないの、見てようぜ」

向かいのベンチでは悪党が二人ニヤニヤとその様子を見守っていた。

「……大事にしたいモンならさあ、とつとと自分のものにしちまわないと、俺みたいなのにかすめ取られちまうぞ?」

そう言つて彼は首元に巻いていた黒いバンダナを口まで引き上げる。

並んだ牙がデザインされたそれが口元に来ると、凶悪に噛む獣のように見えた。

「アマレットはものじゃない……!」

小さい体で歯向かつてくる星火を見て、金髪の上級生は何となく小型犬を想像した。

ああ、この小さいのはこの子に惚れてんだらうなあ、と思うが、特にそのことが彼の行動に影響を与えることはない。

ただまあ、面倒だし適当にいなして追つ払うか、と思つたその時、彼を叱りつける声が響いた。

「パイロン!! 何やってんだお前!!」

ぎよつととして見ると、赤い髪に、物々しいゴーグルを付けた少年が慌てた様子で駆け寄つてくる。

「ティール。何つて……:新入生との親睦を? 深める、的なの?」

「絶対嘘だ。この次はチーム揃つての演習だろ？ 昼休みは打ち合わせしておこうって言ったのに、お前は……！ アレクも待つてるんだ、ほら、行くぞ」

「ええ、嫌だわ、めんどくせえもん。な、テキトーにケガしたとか言つといてくれよ。俺はこの子と親睦を深める」

「ケガとかすぐ治るだろお前！ 行くぞ！ その男子も迷惑がつてるだろ」

「すごい剣幕でやってきたティールと呼ばれた上級生に、星火は氣勢を削がれてしまった。

「ご、ごめん……一年生だろ？ こいつ、俺のチームメイトなんだ。本当にすまない」  
「ゴッグル越しにも視線が泳いでいるのが分かる。後輩である星火に低姿勢で接してくれる先輩の姿に、逆に戸惑ってしまう。

「いくや、だ、だ！ 俺は行かねえ！ ここを離れねえって心に固く誓ったんだ！ ここまで折れたら、俺は誓ったことすら全うできないロクデナシになっちゃうぞ！ お前はそれでいいのか、ティール！」

「お前がロクデナシなのは前からだろ！ いいから、行くぞ、ぞ！！」

「アマレットから離れてくださいーい！！」

アマレットの脚にしがみついて離れまいとするパイロン。

パイロンの巨体を引き剥がそうとするティール。

アマレットを引き離そうとするも身体に触るのを躊躇ったから周りで叫ぶだけの星火。

「……ユナ、なんだこれ」

「もう行くか、キセラ。飽きてきた」

それを冷淡に見つめる二人の視界に、新たに人影が入ってきた。

その人影のうちのひとは真っ直ぐパイロンに近づくと。

ごん。

ぶん殴った。

「ティールに手間掛けさせてんじゃねえぞ。馬鹿野郎が」

そう言って、一発で失神したパイロンの巨体を軽々と担ぎ上げたのは、銀髪のパウナスだった。パイロンに引けを取らないほどの長身と頑強な肉体。

彼に続いて、黒づくめの女生徒もやってきた。

「……ランスロット。すいません。お手を煩わせてしまつて」

抑揚の少ない、事務的な話し方であつた。

「本来ならパイロンのこういうのは私のやるべき事だったのですが」

「お前が謝ることはねえだろ、アレク。チームの問題なんだから」  
ランスロットと呼ばれた銀髪のアウナスはぶつきらぼうに返す。

「テイル！ バカのせいで演習に遅れるとこだ。行こうぜ」

そう話しながら、ランスロットはパイロンを担いだまま去っていく。

テイルがそれを慌てて追いかけていった。

「置いてくよランスロット！ ……それ、パイロン、生きてるよな……？」

上級生たちが去っていく。

呆気にと取られている星火に、去り際、アレクと呼ばれた女生徒が長身を屈めて話しかけてきた。

「申し訳ありませんでした、新入生の方。パイロンにはよく言って聞かせておきますので、どうかご容赦を」

「は、はあ……」

恭しく頭を下げて見せると、アレクが悠然と去っていく。星火は思わず呼び止めた。

「あ、先輩！ 貴女たちは、いったいー」

びたりと、アレクの足が止まる。

アレクが追いついてこないのを察したのか、先をいつていたランスロット、テイルがこちらを見ている。

「申し遅れました。私たちは二年生です。それぞれの名前は、まあ何となく聞いたでしょう。チーム名はー」

アレクが振り返った。

「TRAP。」

そう言うと、優雅な仕草で、深々とこうべを垂れた。

※※※

学生寮の窓からは、少し冷たい夜風が吹き込んでいた。

キセラとユナカイトは何処かに行ってしまった、部屋には誰もいない。

星火は頬に夜風を感じながら、昼間のことを思い出していた。

エイズル先生の講義。

フアウナス差別。

アマレットの寝顔。

頬の感触。

何人もの男子生徒から贈り物をもらっていたこと。

それを見ていた時の気持ち。

風変わりな2年生——とりわけ、パイロンと呼ばれていた先輩の言葉。

《大事にしたいモンならさあ、とつとと自分のものにしまわないと、俺みたいなのにか  
すめ取られちまうぞ?》

アマレットはものじゃない。けどー

星火は窓を開け放ったまま、部屋を後にした。

砕けた月が夜空を照らしていたが、厚い雲が、すぐ近くに迫っていた。

※※※

「——やっぱり、ここだったんだね」

ヘイヴン・アカデミー学生寮の屋上。

低い手すりだけで囲まれたこの場所は、転落事故の恐れがあるため立ち入り禁止とされていたが、多くの生徒にとってそのルールは無いも同然だった。

「あ、シン。おはよう」

「おはよう、じゃないって。今は夜だからね。こんなに、月が綺麗なー」

月光に照らされ、アマレットのピンクゴールドの髪が静かに輝いていた。

白い肌も、月明かりを吸い込んだように光って見える。

その怪しくすらある美しさに思わず星火は息を飲んだ。

「となり、いい？」

「ん」

屋上の手すりの向こう、屋根の淵に腰掛ける。

隣のアマレットは、足をばたばたさせている。

「あ、あんまり足をバタつかせたら、危ないよ。その、落ちちやうから」

「ん」

そういうとアマレットは脚を折り曲げ、両手で抱えた。

膝の上に小さい顎を乗せ、星火の方を見た。

「シン、どうしたの？」

「あああいや、どうしたかっていうか、そのー」

星火の喉から、何度も何通りもの言葉が生まれそうになつては消えていく。

奇術のステージならなんてことはないのに、何でこんな。

ええい、なるようになるさ。

「きよ、今日さ、エイズル先生の講義を受けてから、ずっと考えてたんだ。その、差別とか、平和とか、に、ついて」

「？」

「それで、思ったんだ。この世界はまだ大変なことがいっぱいあるけど。その」  
深呼吸。

「僕は、君を守りたいんだ。この世界の残酷なことから。ずっと。そして、いつか平和になった世界で、君に僕のステージを見てほしい。できれば、一番近くで」

沈黙。

星火の目は、何とかアマレットの両目をしっかりと見据えていた。

「ねー……」

しばらく何かを考えていた様子のアマレットが、口を開いた。

「シンは、アマレットのこと、好き？」

心臓が裏返った。

胸骨の内側を叩いたのではないかというくらい、衝撃。



「ううええええええつ  
!!???」  
そ、そ、そりやその、そりやもちろんその、す、す、す

「なら、守つてね」

一言。

アマレットが告げた。

星火には最初、その意味がわからなかったが、すぐに理解した。

星火達の眼前。

人がいるはずのない空間に。

影が立っていたからだ。

「何だっー」

星火は何かの力に引つ張られ、猛烈なスピードで屋上に投げ出された。

背中を強かに打ち、息を喘がせる。

しかし、跳ねるように起き上がるとすぐさまアマレットの元に走った。

「アマレット逃げろ!!!」

と言いながら部屋着姿ながら身につけていた腕時計型の操作盤を叩き、変形する棺桶型の彼の武装《トップシークレット》を呼び出す。

《トップシークレット》は驚異的な速さで応じ、閉じた棺桶のような形のまま。影に突っ込んだ。

小型車くらいの質量の金属塊がこの速度でぶつかれば、常人ならひとたまりもない。

さながらミサイル。

しかし。

《トップシークレット》は、人影をすり抜けるように通過していった。

「!?!?」

空飛ぶ棺桶はそのまま大きく旋回し、アマレットの傍に静止した。

「アマレット、その中に入れ。はは、最初に会った時のことを思い出すね」

星火はそう笑って見せるが、すぐにその笑顔は凍りついた。

《トップシークレット》の機体はアマレットの傍には無く、

黒い人影が代わりに立っていたからだ。

人影が、ゆっくりと星火の方を向いた。

黒く、黒い、それ自体が影であるかのような姿。

そして、その姿は。

「え、エイズル先生……?」

「今晚は、ジャスパー君。邪魔して悪いね。だが君には用はないんだ」

「何……?」

エイズル・ヌウは片膝をつくど、アマレットに向かって深く頭を下げた。

「お迎えにあがりました。アマレット・D・K。我々《オアシス》には、貴女が必要だ」

※※※

アマレットは後ずさると駆け出し、星火の背後に隠れた。

「シン、あのひと、こわい……!」

「分かってるよ。大丈夫だからね、アマレット」

自分の肩を掴む小さな手を優しく握り、言い聞かせる。

「何が大丈夫なんだい?」

引つ張られるような風圧を感じる。

突如。眼前にエイズルの白い顔が現れた。

「くっ——！」

星火は再び距離を取る。

おかしい。あんなゆつたりとした動作でこの距離の移動ができるはずがない。  
できるとすればセンブランス。

正体は何だ。高速移動か——

「瞬間移動ならタネは割れてますよ！ 先生！」

瞬間、《トップシークレット》の各部が開き、先端に剣の付いたワイヤーが射出された。  
剣は方々に突き刺さり、ワイヤーを蜘蛛の巣のように、星火の周囲にはりめぐらせる。

（こうすれば——）

ぴんと張ったワイヤーの一本がわずかに撓んだ。

「そこだ——」

星火は指を高らかに鳴らすと、ある一箇所を狙って《トップシークレット》からダスト弾が発射された。

弾丸が何かに当たると音がする。

命中——

したのは、コンクリート片だった。

「たしかに奇術なら君にはタネはお見通しだろうね」

星火の背後に、黒い影が佇む。

「しかしこれは奇術ではない。ましてや、私のセンブランスは——」

星火の身体を、エイズルの手刀が貫く。

「正確には瞬間移動などではない」

星火は立つ力を失い、倒れ伏し——

は、しなかつた。

エイズルも異変に気付く。突き刺した手刀に、なんの手応えもなかつたからだ。

「！——これは——鏡か」

「分かつてるよ、先生。貴方の力は瞬間移動なんかじゃない」

星火が指を鳴らすと、エイズルの傍にあつた星火の姿が消えていく。

センブランスの《鏡面》を複数箇所を展開し、自分の姿をエイズルの近くに投影して  
いたのだ。

「物質の位置を入れ替える能力——おおかた、そんなところだろうか？」

「ふ……レポートの出来の割には、察しがいいようだね」

「貴方が僕の前に現れた時に、何故だか《前に引つ張られる》風圧を感じたんだ。物体が前に進んでくるなら、《後ろに押される》力を感じるはず。だからピンと来たのさ。目の前の空間自体が何かの力で消失したんじゃないかってね」

「いやに饒舌じゃないか。奇術のステージでもやっているつもりかい」

「そんなところさ。しかし厄介だね、その力。どうやら物体ではなく物質——空気とか酸素とか、そういうものにも有効なようだ。瞬間移動のように見せていたのは、相手の目の前の空間にある空気と自分を入れ替えていたって、そういうことだろ？」

「ふむ、合格点をあげよう。素晴らしい。しかし、説明に長々と時間を使うのは感心しない」

「そりゃ困る。だって長く説明しないと、稼げないじゃないか」

星火の背後から、飛行形態に形を変えた《トップシークレット》が飛び立った。

「アマレットを逃す時間が、ね」

側面に突き出たグリップには、アマレットが掴まっている。

エイズルがその様を見上げているが、表情には余裕があった。

「ジャスパー君、私は卑怯な行いを好まない」

「僕が卑怯だって？ めっそうもない。これは奇術ならぬ戦術さ」

「いや。君の行いを咎めるつもりはない。そう、戦術だ。だから、これも卑怯な行いではないと、断っておくよ」

「!?？」

星火の胸を悪寒が貫く。

弾かれたように空を見上げると、垂直に飛び上がる《トップシークレット》に、高速で接近してくるものがあつた。

「伏兵は戦術の基本、ということだ」

翼を持った人影が《トップシークレット》に飛びかかる。

コウモリの翼を持ったファウナス・ラスティ・ネイルであつた。

「ハアイ、一年生ちゃん。ヘイヴンは個人用の乗り物はー禁止よー」

開いた口腔から、超高密度の空気の振動を発生させる。

《トップシークレット》のどこかのセンサーが破壊されたようで、バランスを失つて落下していく。

「アマレット!!!」

アマレットはラスティに抱きかかえられ、屋上に降り立つた。

細い腕で首を拘束され、思うように動けない。

「や……………いやっ……………」

アマレットは身をよじるが、ラスティが逃がさない。

「無駄よ。あんたにはわたし達と一緒に来てもらう」

「はな……………してー!」

「動かないの。それと、言うまでもないだろうけど、あんたのセンブランスはわたしには

効かないからね」

アマレットの動きが止まる。

「センブランズ……？ アマレットの……？」

星火は青い顔でつぶやく。

チームメイトの自分すら知らない、アマレットの能力。

なぜ彼らがそれを知っているのか。

いや、それよりも。

それほどまでにアマレットのことを調べ尽くしているということは、今起きていることは相当計画的に行われているということ。

ならば。

「アマレットを……離せ!!!」

こうしてはいられない。

何としても、こいつらを倒して、アマレットを救う。

守ると決めたのだから。

ラストイに向かって駆け出す。

《トップシークレット》は墜落。再起動するには時間がかかる。

部屋着のままここに来たから、ほぼ丸腰。



唯一着けている腕時計型の操作盤では、《トップシークレット》の内蔵武器もわずかし  
か使えない。

しかし。

大丈夫だ、と星火は自分にウソをつく。

ラストイの目の前で、星火は地面に手をつく。

限界まで身をかかめると、両腕をバネにして両足で蹴り上げる。

避けられる。

のは、想定済み。

飛び上がった自分の体をセンブランスの《鏡面》で覆い、一瞬で身を隠す。

ラストイが目に見えて狼狽える。

《鏡面》で目隠しをし、側面から攻撃を繰り返すと思わせて、

あえての正面突破。

鏡面のど真ん中から、かかと落としを繰り返す。

それは、ラストイの鎖骨あたりに命中した。

苦悶の表情のラストイはそのままの姿勢で、中型の衝撃波を放つ。

星火はとっさにガードしたが、衝撃で飛ばされる。

「はは、奇術がなくても、ちよつとしたもんだろ」

傍らには、いつのまにか奪い返していたアマレットがいた。

「はっ、まあまあね。でもー」

突如、風圧。

「詰めは甘いようだ」

そして背後には、エイズルが立っていた。

エイズルの手が、星火の頭を掴み、持ち上げた。

その細く長い指からは想像がつかないほどの、猛烈な握力が星火の頭骨に圧をかけた。

「ぐあ……っ！」

「御察しの通り、私のセンブランス《スイッチ》は物質と物質の場所を入れ替える。入れ替えるもの同士の体積がある程度似通っていることが条件。質量でないあたり、使い勝手が良いと評価している。ただ、入れ替えるものが動かしづらい状態にあると、それだけオーラを消費するようだ」

ぎしぎしと音が聞こえるほどの力がこもる。

「あ……マレットは……わたさない……っ！」

「私も学内で無駄に人死にを出したくはないんだよ、ジャスパー君。手を引け。

なに、心配ない。君は今まで通り、何事もなかったかのように学園生活を送るんだ。ただし、私たちのことについては一切口を噤んでね」

「ふぎ……けるな……!!」

「私の《スイッチ》はまだ検証不足な点があつてね。まだ色々と実験が必要なんだ。例えば——人体の中にどう作用するか。君の脳幹と、どこか適当な血管を入れ替えることを、この場で実験したつて良いんだよ」

「……!!」

エイズルの手が、昏く、紫に光る。

込められたオーラが星火に伝わり、その内部に恐るべき作用を起こそうとした——が。

「……ぬうつ!!」

エイズルは痛みに呻くと思わず星火を放した。

手が、腕が、ずたずたに引き裂かれていた。

切り裂いたのは、鉄扇。

月明かりに、血まみれの扇が閃く。

じやらん、と金属の擦れる音を響かせ、鉄扇が閉じた。

扇の向こうにある赤い瞳が、エイズルを冷たく見据えていた。

「あーあ、幻滅。わたしのこと守るんじゃないの？ 星火・ジヤスパークン？」

アマレット・D・K。

アカデミー入学以来、初めての戦闘態勢であった。

※※※

「アマ……レット？」

倒れ伏した星火は、ちらつく視界にアマレットを捉える。

しかし、その様は――

「もうちよつと粘るかと思つてただけだね。とんだ期待はずれだわ。でもまあ、弱いなりに必死になつてくれたことには――お礼だけ言つとくか」

そう言うのと、アマレットの姿がふつ、と消えた。

消えた、のではない。

異様なまでに緩急をつけた動作で、視覚が騙されたのだ。

ピンクゴールドの髪をなびかせ、素早くも軽やかな動作でラスティに飛びかかる。迎撃に動く翼の横薙ぎをひよいと飛び越え、両足をとんと相手の肩にあてがう。

「調子乗りすぎたね、おばさん」

眉をひそめ、皮肉つぼく嗤う。

瞬間、下から勢いよく鉄扇を振り上げ、ラスティの整った顔を直接斬りつけた。

唇から鼻、左目を一直線に裂かれ、ラスティは泣き声を上げる。

が、お構いなしに顔面めがけて前蹴りを放つ。

後方に吹き飛んだラスティは、屋上を囲む手すりに後頭部を打ち、そのまま動かなくなつた。

しかしアマレットは動作を止めない。

腕を横に大きく振ると、鉄扇が彼女の周囲を旋回して飛ぶ。

すると鉄扇は空中で分解した。

分解したパーツは、一つ一つが美しい造作の、反りのある短剣になっていた。

全部で九つ。

九つの短剣は、翡翠色の組紐でアマレットの手に繋がれていた。

その紐を、鞭のように、なぎ払つた。

九つの短剣は生きているかのように、蛇のように空中を這い回る。

「《スイッチ》とかいう能力。先生、たぶん言つてなかつた発動条件があるよね？ 例え  
ば——対象になる場所に動くものがあると使えない、とか。だからさ、こうやつて動き  
回るもので空間を埋め尽くせば、あのうぎつたいテレポートごっこは使えない」

ひどく高圧的な物言いは、星火の知つていたアマレットとは程遠い。

朦朧とする意識の中、なんとか口を開く。

「あ、アマレット……なのか？」

「じつとしてなよ、星火くん。ちよつと……いや、だいぶウザかつたけど、今まで優しく  
してくれたお返しに、ちよつとだけ助けてあげる」

組紐の先の短剣を操りながら、悠然とアマレットは歩く。

「で？ 先生。わたしが必要、なんだっけ？ 《オアシス》って確か、小規模のファウナ  
ス支援団体だったよね。なに、裏じやこんなことしてんだ」

「……何か隠していると知つてはいたが、ここまでとは。女優だね、君は」

「いい女は女優なんだよ、みんな。女優がみんないい女つてわけじゃないんだけど」

「質問に答えよう。アマレット・D・K、君のような強いセンブランスを持つものを探し  
ていた。我々と共にきてほしい。《オアシス》に。差別のない新世界を作るために」

職業柄、嘘くささとか、嘘を隠している様子とか、そういったものに敏感な星火であつ  
たが、エイズルのその言葉には一片の嘘も感じなかつた。

穏やかで、諭すような。そして、強い決意のこもった。

差別のない新世界という絵空事のようなことも、しかし、本気で叶えようとする者の言葉だった。

「ふうん、差別のない世界、ね」

「そうだ。私や君のようなファウナスが差別されることなく、尊厳を持つて生きることのできる世界。君もファウナスなら、それがどんなに尊いか、どれだけ叶えるべきか、判るだろう」

アマレットは、少しだけ何かを考えたようだった。

手に持った組紐を器用に操作すると、方々を飛び回っていた短剣がシルシルと巻き戻り、金属音を立てて扇の形に合わさった。

「やだよ、興味ない」

扇で口元を隠し、目だけで嗤う。

「何故だ。虐げられてきた同胞を、これから生まれてくるファウナスの子供達を、こんな差別がはびこる世界で苦しめ続けようというのか」

「だって、わたしは苦しんでないし」

「それはエゴだ。利己的で、幼稚な――」

ばしやん、と鉄扇で足元の屋根を斬りつける。

「うるさいなあ。わたしはファウナスだけど、『ファウナス』なんて名前で生きたことはない。クソろくでもないことばかりの人生だったけど、どうにかしてきた。それは、わたしがわたしだったからだよ。ファウナスだとかそんなのは関係ない。わたしだったから生きてこれたんだ」

「違う。この世界のファウナスへの偏見や差別がなければ、もっと幸せに生きられたはずなのだ。苦境を知っている君だからこそ――」

「いい加減にしろよ。わたしは一度だって可哀想だったことはないし、これからも一瞬だって不幸になるつもりはない。わたしを可哀想だと言うなら、それはこの上ない侮辱だよ」

「侮辱などしない。私は救いたいのだ」

「そんなに何かを救いたいなら、自分じゃ何もできない、可哀想で無能な連中だけ侍らせて、救世主ごっこでもしてなよ、間抜け」

エイズルが怒りに吠えた。

山羊のファウナスながら、雄叫びをあげ、アマレットに突進してくる。

凶悪に開いた両手が、アマレットに掴みかかろうとする――



が。

「ほおら、馬脚を表した。あれ、山羊なんだっけ？」

翡翠色の組紐が、その腕に巻きついた。

一度切り裂かれた腕をぎりぎり締めて上げると、激痛が走る。

「ぐおおおおおっ……！」

その様を見て、扇で口元を覆いながらアマレットは啜う。

短剣が《八本》組み合わさった扇で。

「わたしの《ナインテイルズ》はその名の通り九本一組。相手の武器はよく見てなきやダメだよ、先生？」

「く……」

「ねえ、どうする？ 先生。こんな子供に良いように煽られて、このザマだよ。ねえ、どうしよつか？ あしたから。大変だろうなあ、アカデミーにも知られちゃうんだろうなあ？」

アマレットが心から楽しそうに言うのと、彼女の体の表面から、赤みを帯びた金色の光が怪しく溢れ出す。

それはアマレットのセンブランスの発現だった。

その能力は――

「よくわかったよ、アマレット・D・K。何としても君を手に入れる」

しかし、エイズルの能力のほうが早かった。

屋上の手すりが二つ醜くひしゃげ、左右からアマレットに向かって飛来した。

さながら歪んだ鳥かごのように。

「ウソ、やばっ—」

すんでのところでアマレットは高く飛んで躲す。

エイズルの《スイッチ》で両端の手すりを無理やり入れ替えたのか。

乱暴に引きちぎられたような鋼鉄製の物体。

想定外のその馬力に、アマレットは舌打ちする。

飛び上がった体勢のまま身体を回転させ、その遠心力で再度《ナインテイルズ》を投

擲、分離させる。

残る八振りの短剣がそれぞれの軌道を描いてエイズルに襲いかかった。

どれもがエイズルの腕や脚を斬りつけるが、怯んだ様子が無い。

至近距離から斬りつけないとまともなダメージにならないようだ。

こいつ、細っこい見た目の割に異様にタフだ。

強い信念とやらがそうさせるのか。

アマレットの戦闘パターンでは、こういった高い耐久性を持った相手とは相性が悪

い。

星火が動ければ多少なりとも話は違うのだろうが、そうもいかない。

アマレットはエイズルを警戒しながら着地するー

のは、見計らわれていた。

ぶん、と風のなる音と共に、眼前にエイズルが現れた。

軌道を読まれた、と悔やむ暇もなく力任せに組み伏せられる。

小さく喘ぐアマレットの口にはエイズルの長い指がねじ込まれ、喋ることもままならぬ。

「さあ、来るんだ、アマレット・D・K。こんなやり方は本意では無いがー」

不気味なほどに穏やかなエイズルの言葉は、滑稽なほどに幼げな声にかき消された。

「あーあ、いけないんだー！　せんせーにいつてやるー！」

手すりの上に立った人影が、跳躍。

そのまま、力任せに手に持ったアタッシュケースのようなものを叩き込む。

エイズルは食らう直前に躲すが、その隙にアマレットが離れた。

ゆつくりと上体を起こす人影を、月光が照らす。

そこには。

「……バルサミカ君か。アバグネイル君もいるな」

「ぎやはは、突っ込めよ。おめーが先生じゃねえかよ」

「いい画をありがとうございます。お陰様で学生生活が更に充実しそうですよ」

手に持った携帯端末（スクロール）のカメラを構えたキセラとユナカイトが現れた。

「……いつから見ている」

「あー？ 確か、おチビが《——やつぱり、ここだったんだね》とか言いながら屋上に来たあたりからかな」

「め……めちやくちや最初からじゃないか!!」

倒れ伏したままの星火がかすれた声で抗議した。

「おう、おチビ。生きてたか」

「……うん。でも、何も……できなかつた……!」

「はあ？ んなこたねえよ」

「……ええ？」

「あたしとユナを死ぬほど笑わせてくれた。良く撮れてたぜ、お前の告白シーン」

「いますぐそのデータ、消せえ——っ!!」

星火が跳ね起きた。

「ぎゃははは、元気じゃねえか」

「お陰様でね!! ……でもまあ、ありがとう。リーダー」

などと清らかな会話を楽しむチームメイトをよそに、ユナカイトは凶悪な笑みを浮かべながら、エイズルに歩み寄る。

「先生。僕はね、情報こそがこの世で最も強い武器だと思ってるんですよ。今、僕の手元にはとても強い武器がある。でもね、あなたの立場を失墜させたくてやつてる訳じゃあないんですよ。そうだな、僕たちの充実した学生生活を、ほんの少し助けてくれれば良い。だから、先生は時々思い出してくださいー僕たちがこの情報を持っていると言っことを」

「……感服したよ」

「結構。でしたらー」

「しかし、完敗したわけではない」

エイズルが指を鳴らした。

※※※

エイズルが何か合図をすると、階下から十人くらいが駆け上ってきた。

角や耳、翼などを見るに、その全員がファウナスのようだ。しかし、顔は見えない。一様に仮面を被っていたからだ。

口まで覆う、優しい微笑みの仮面。

「《オアシス》は広がっていく。この世界を包み込むまで」

「《オアシス》は広がっていく!!」

エイズルの穏やかな号令に、闘士たちが時の声で答えた。

笑顔の仮面と、その殺気立った声のミスマッチがひどく不気味であった。

「同志エイズル。お下がりにください。そのお怪我では」

「あれは……同志ラストイカ？ おのれ、差別主義の悪鬼どもめ……!」

《オアシス》の戦闘員たちは口々に何かを言いながら、陣形を整えていく。

「ぎやははは、差別主義だつてよ。その先生のテストだとあたしなんか差別感情なし

だつたうのにな」

「悪鬼呼ばわりとはな。随分と平和的な話し合いがお好みようだ」

「アマレット、大丈夫かい……?」

「触らないで」

「ええ……」

対するキセラたちは——チーム《XUXA》は、陣形など組まない。

連携などする気がない。

「よお、あたしたちはチームだけだよ、段取りなんか組んだことがねえ。それぞれの能力すらロクに把握してねーんだからな。めいめいテキトーに仕掛けて、どつかのバカがエラー吐いたらテキトーにフォローする。できねえわきやねえよな？」

「問題ない。極端に足を引つ張るやつもないだろうからな」

「僕は武装がダメだ。攪乱に集中する」

「星火くんはわたしをカバーしなさい。肌キズでもついたら絶対に許さないから」

「集中するって言ってるのに！」

しかし、バラバラな四人が、共通の目的を持った時、瞠目すべき力が――

アマレットは分離した《ナインテイルズ》を自らの周囲に配置し、突撃する。

星火は《鏡面》でアマレットを覆い、相手の視界から隠す。

ユナカイトはブーツのホイールを疾走させ、敵陣を大外から攻める。

キセラがセンブランスで床材をひっくり返す。

キセラのセンブランスに巻き込まれて、全員すつ転んだ。

「いやいやいやいや、全然ダメじゃないか！」

「四人いて全員突撃とかありえねえだろ」

「その認識も共有しないとダメだろうが」

「ちよつとお、ヒザ擦りむいたらどうすんのよ」

口々に喧嘩する。

のを、アマレットが収めた。

「いい？ おバカさんたち。わたしが、最初に仕掛ける。わたしのセンブランスは、こういう大勢相手向きなんだよ。でも、直接ダメージを与えるわけじゃないから、そのあとはあんたたち、テキトーによろしく」

「アマレット、危険だよ！ 僕がー」

「触んなつつうの」

「いててててて」

星火の腕をひねり上げるのをやめると、アマレットは敵陣に向き直った。

「じゃ、やろうか」

「うう、何か僕、いいとこないなあ……」

「はは、やつとチームみてえになつてきたじゃねえか」

「ふん、リーダーはお前だろ。一発締めろよ」

嘘つき。

ペテン師。



奇術師。

詐欺師。

そんな四人からなる、当代随一の問題児チーム（XUXA（シューシャ））。  
初めて並び立った瞬間であった。

## e p . 5 "X U X A"

（IMG58045）

「結局のところ、これしかなかったんだよ、あたしは。あたし達は」

目の前の少女はそういうと、瓶のコーラを一口あおった。

「お前とかさ、よく《正しい》《正しくない》って言うけどよ、その基準があるのも、お前がある程度いわゆる《正しい》世界に生きてきたからだと思っただけ。屋根のついた建物で、クツションのある場所で寝られて、決まった時間にメシが食えて、その辺を歩いてても、滅多に盗まれたり犯されたりしない、《正しい》世界にな」

手元のフライド・ポテトの入った袋をごそごとと弄る。中身が足りなかったのか、いきなり私のチキンウィングに手を伸ばして、ぱりぱりと食べ始めた。

「まあ、安全なことを《正しい》って定義づけるのは分かるぜ。じっくりくる。生きて、産んで、増えれば、生き物は安泰だからな。生き残ったり、存続することが《正しい》ってのは、たぶん間違っていないんだろーぜ。」

でもそれは、社会のあり方にとつての《正しい》だ。それが、あたしとか、お前とか、個人の人生についてだと、どうだよ。

お前はぼちぼち金持ちの家に生まれて、色々あったんだろーけど、物質的な不自由はなかっただろ？ で、お前はそう生きてきた中での《正しき》を知ってる。そう生きてきた上で、物事の《正しい》《正しくない》をお前なりにジャツジしてるんだろ。そんなお前から見たら、そりゃああたしは《正しくない》んだらうさ。騙すし、盗むし、殺すしな。

でもよー、繰り返すが、あたしにはこれしかなかったんだよ。あたしがーあたし達が生き残って、存続するためにはこれが《正しかった》んだ。

痩せつぼちの犬が生きるために可哀想な小鳥を食い殺してもよ、それは《正しくない》ってこたあねえだろ？」

チキンウイングを食べきってあつというまに骨だけにすると、ペーパーナプキンを10枚くらい束でござと持っていく。

真つ赤な大きなマウンテンジャケットに食べかすとか塩とかが落ちてないか、やけにしっかり見たあと、指先を念入りに拭くと、こう言った。

「結局のところ、納得できてるかどうかなんだよ。あたしにとつて一番大事なのは《カネ》と《自由》だ。それが増えることが、《正しい》。前向きだろ？ そのためにはなら、どんなことだつてする。で、お前にとつての《正しい》が、人と仲良く、とか、平和に、とか言うんなら、それはそれでいいのさ。ただし、お前が納得してればな」

納得。

私はいつだって《正しく》あろうと行動してきた。

力及ばずに人に迷惑をかけたなり、好きな人に蔑まれたり、良いことはあまり、なかつたけれど。

納得できたことなんてない。でもそれは、私の能力が足りないからで。

「どーだかね。あたしから見れば、お前のいう《正しい》ことつてのはいつも、誰かに気に入られるためにやつてることみてえだ。でもそれを、必死こいて自分のためだと言ひ聞かせたり、塗りつぶし続けてるみてえに見えるぜ。笑えるな。お前、自分にとって何が《正しい》のか、ちゃんと考えたことねえんじやねえの？」

私のお金でご飯を食べておきながら、ひどい言い草だ。

なんでこんなこと言われなきやいけないのだろう。

私は、この人をーキセラ・バルサミカを捕らえにきたと言うのに。

「——今だって、あたしを縛り上げてアカデミーに報告すりゃあいいのに、こんなに喋らせてよ。何が正しいか、なんて考えてるから、お前みたいに優しいやつは色んな奴のことを想像しちまって、何もできなくなつてんだろ。そうじゃなくて、お前はお前のこと

だけ考えろよ。お前しかいない、お前だけの世界で、お前が一番満足できることがなか、考えろ。ドーゼ人間は一回しか生きられねえんだ。死ぬほど満足して死ぬしかねえじゃねえか」

黄色いサングラス越しの目が少し細くなる。

こんなお説教までされるとは。

なんでここまで言われなきやいけないんだろう。

なんでここまででー言ってくれるんだろう。

「さて、ごちそーさん。うまかつたぜ。あたしはもう行く。ユナとかを探しに行かないきやいけねーからな。お前は？」

単に、まだここにいるのか、とか（まだ食べきっていないし）、この後どうするんだ、とか、それくらいの意味で言ったのだろうが、その「お前は？」は私にはやけに鋭く感じられた。

私は、どうしたい？

《これしかない》まで、考えて考えて、考える。

家も学校も関係なく、私たる私が、いましたいこと。

正直に。大胆に。

傍若無人に。唯我独尊に。

、最高に我儘になったら、私は――

「わたつ、私は、キセラさんとまだアカデミーで会いたい！ おなじアカデミーの生徒として！ ……お友達として」

急に蛇口を全開にしたみたいに、不恰好な言葉が私の口から溢れ出た。

顔が熱くなって、心臓がどきどきする。ぜんぜんうまくしゃべれなかったし。

でもたぶん、これが私の《これしかない》。

しかし、言い終えた時にはもう彼女の姿はなかった。

「もう、ひどいなあ……」

シロップを入れたアイステイーを少し飲んで、自分を落ち着かせる。少しだけ。

ふう、とため息をついていると携帯端末（スクロール）がメッセージの着信を知らせてきた。

私たちにキセラさん達——チーム《X U X A》の追跡と捕獲の指令を出してきた、エイズル先生からだった。

「街にはいたかい？ 彼女たちは」

少し考えて、返信。

「先生、申し訳ありません。見当たりません。目立つ風貌だから、目撃情報があるかと思っていたのですが。もう少しここで情報を集めてみます」

これは、私が初めてついた嘘だった。

——かもしれない。

※※※

「わたしが欲しい、とか言ってたよね？ だったらかかってきなよ」

アマレットは腰に手を当て、挑発する。

《オアシス》の仮面をつけた闘士たちは一瞬ためらいを見せたが、すぐに武器を手にアマレットに殺到した。

「待て、同志たちよ！ 近づいてはー」

エイズルは闘士たちに警告するが、その進撃は止まらない。

その様を見てアマレットは扇を口元に当て、目だけで嗤う。

すると、身体の表面から赤金色の光が溢れ出した。

その光は煙のように空気に溶け、周囲の《オアシス》闘士たちにまとわりつく。

しかし、その光に怯むことなく、闘士たちはアマレットに攻撃を加える――  
「アマレット!!」

星火は絶叫し、駆け出す。  
が。

アマレットに近づいた数名の闘士たちは急に糸が切れたように脱力し、そのままふらふらと周囲を歩き回っていた。

「な、何だ……?」

数秒、闘士たちはあたりを不規則に歩き回ると、再び武器を構えた。

——同胞であるはずの《オアシス》闘士達に向かつて。

そしてそのまま、同士討ちを始める。

現れた10名程の《オアシス》仮面の闘士たち。

その半分が、一瞬にして敵に回ったのだ。

アマレット・D・K。

そのセンブランスは《傾城》。

彼女のオーラに触れたものを一定時間、言いなりの操り人形にする能力であった。

「最初は《魅了》とか呼んでただけど、何番めだったかなあ、私を《保護》してくれたオジさんがつけてくれたんだよ。《傾城》って。ちよつとかっこいいでしょ?」



まあ、わたしを性愛の対象にするセクシャリテイの人にはしか効果ないんだけどね」

「……これほどとはね。アマレット・D・K」

《オアシス》、メンバーの多様性足りてないんじゃないの？ この世は男と女しかいないわけじゃないんだよ」

エイズルは引きつった笑みを見せる。

「下がれ！ 同志たちよ！ あの娘に近づいてはいけない。距離をとって無力化するのだ！」

正気を保っているように見える闘士たちはその号令に慌てて後ずさりし、武器を持ち替えた。

「ほら！ 何してんのおバカさんたち！ さっさと援護してよ!!」

アマレットの声に弾かれたように、チーム《XUXA》は走り出した。

「あいつの方が向いてるんじゃないのか、リーダー」

「うるせえよクソメガネ」

「僕は歓迎」

星火は空中にオーラを放ち、アマレットの《ナインテイルズ》に《鏡面》を張る。

「アマレット！ これで君の攻撃はカンタンには見えない！ 薙ぎ払え！」

「ふん、悪くないねー行けっ!!」

鏡を纏った、見えない刃が四方八方——正確には九方向から襲いかかる。

ただでさえ夜間で視界が悪い中、カモフラージュが施されたそれは、集団戦闘においてはえげつないほどの効果があった。

どこから攻撃が飛んでくるかわからない。

ひとつひとつが致命傷になる攻撃ではないにせよ、その心理的な圧力は陣形を乱すには十分すぎた。

「おいおチビ! 狐女のアレ、あたしたちにもどこにあるか分からねえじゃねーかよ!」  
「アマレットの安全が第一だ」

「味方の武器にやられるなんてのは御免被るぞ」

「……味方の武器、ね。ねえキセラ、ユナカイト。こういうのはできるかい?」  
「ああ?」

どこから短剣が飛んでくるか分からない、それじたいに恐怖はない。

そんなことは《オアシス》の闘士になるための訓練で慣れている。

はずだった。

味方の半数が急に敵の戦力になり、自分たちに武器を向けてくるという想定外の事態

が、思考力のリソースを食いつぶしている。

そんな状態に加えて、敵の見えない武器の戦術。

思考力が万全の状態であれば冷静に対処できるものを。

歯噛みしながら彼は残弾数を確認するため、自分の銃に目を向けた。  
ない。

武器がない、訳ではない。そこには自分の狼狽した顔が映っていた。

鏡。自分の手にした武器から前腕にかけて、メッキ加工をしたように《鏡面》が貼り付けられていた。

慌てて空いている方の手でかきむしるが、なんの効果もない。

思考が完全に混乱しそうになる中、辛うじて残った理性が「落ち着いて敵を撃て」と命じる。

混乱を振り払うように視線を前に向け、敵に狙いをつける。

まずは、同志エイズルが指示する標的のひとり、濃いピンク色の髪をした、小柄なー多い。

濃いピンク色の髪をした、小柄な女生徒。確か名前は《キセラ・バルサミカ》。

それが、視界の中に、何人もいた。

自分と同じ方向を向き銃を撃つもの、こちらに向かってくるもの、何人もの《キセラ》

が。

恐怖と混乱に支配されそうになった彼は、自分を守るもの——手にした銃に縋るように視線を向けた。

鏡面が貼られたその銃には。

憔悴した表情の《キシセラ・バルサミカ》の顔が映っていた。

「うっ、うわああああああ！」

銃をめちやくちやに撃つ。弾丸は明後日の方向にばらまかれ、夜空に消えていった。

「はは、これぞプレスティτζってやつだ！ 上手くハマったね、ユナカイト」

「ふん、この大人数をブスに《偽装》するのは苦痛でしかないがな」

「ぎやはは、あたしそっくりの美少女だらけだ。天国みてえじゃねえか」

敵の武装を星火の《鏡面》で覆い、武装の状態を確認できなくなるように攪乱。

さらにユナカイトのセンプランスで敵勢力の全員をキシセラに《偽装》し、追い打ちの攪乱。

アマレットの见えない《ナインテイルズ》が方々から襲いかかるといふ状況に加えて二重の攪乱を行うことで、相手のチームワークと判断力を極限まで奪う作戦。

狙い通り、《オアシス》闘士たちは恐慌状態になっている。

そこにー

「こいつで仕上げだ。——ぶっ潰れな!!」

キセラが渾身のオーラを込めて足元の建材を広範囲で《裏返す》。

次々と悲鳴が上がり、建材に挟まれ気を失った闘士たちの身体が転がっていた。

許容量の限界近くまでオーラを瞬間的に使ったキセラは鼻血を手で拭うと、嗤った。

「悪くねえな、チームつてのもー。さて、先生よ、立つてるのはあんただけだ。どうする?」

エイズル・ヌウはしばらく俯いたままなにかを考えると、姿を消した。

※※※

「エイズル君、あまり騒ぎを大きくしないでくれ。あのお方のシナリオに障りがでるようなら、私は君を庇いきれない」

「……私は《レリック》などには興味はありません。私が望むのは差別のない世界のみです。その実現のためなら、セイラムの思惑にも乗りましょう」

「……! 軽々しくその名を口にするのは……!」

「しかし、《ホワイト・フアング》のように子飼いになるつもりはない。あれは、破壊活動で溜飲を下げるだけの集団に成り下がった。私はあくまで、平和を目指します。破壊の先にしか実現し得ないものであっても」

「であれば、まずはアカデミーの平穩の維持に尽力してくれたまえよ。なんだったか、チーム……」

「X U X A」

「掴まれたのだろう。ならば、除いてもらわなければ、困る。私もー君も」

「ならば除きましよう。どうやら彼らは、後ろ暗いことがあるようだ。そう、難しいことではないでしょう」

「そうか。どうするのだね」

「学長。お手を煩わせてしまい恐縮なのですが、ミストラルのプロハンターネットワークに、今から申し上げる情報を流してください。あとは私が」

※※※

「お嬢！ いけません。危険です！ 今朝のニュース、見てないんですか！」

「いや、離して！ 嘘よ！ キセラさん達が、こんな……！」

ゼオラ・ウルアリアスが率いるチーム《ZBLA（ゼブラ）》の部屋に、朝から言い争う声が響き渡る。

その声に起こされ、目をこすりながらリリフローラがベッドから身を起こした。

「ふああ、おはよ、ゼオラ、ベジヨタ。……どしたの？」

「どうしたの、じゃないわ。スクロール見てみなさい」

「……？」

リリフローラは枕の下敷きになっていたスクロールを掘り出すと、アカデミーからの緊急メッセージが来ていたことに気づく。

「ウソ……この映像って」

メッセージにはウェブサイト上の動画へのリンクが貼られていた。

そこには。

チーム《X U X A》の面々が、アカデミーの教師達と争う場面が克明に映っていた。

星火・ジャスパールがエイズル・ヌウ先生に彼の武装をぶつける様。

キセラ・バルサミカが同じくエイズル先生に殴りかかる様子。

ユナカイト・アバグネイルが火器を発砲する場面。

アマレット・D・Kが、ラスティ・ネイル先生を斬りつける瞬間。

その一方的な暴力がありありと捉えられていた。

「ラストイ先生は顔面を斬りつけられて大ケガ。片目も失明は免れないだろうって……」

「ウソだよ！ たしかにアイツら、乱暴なところはあるけど、理由もなくこんなことするはずないよ！ ねえ、ゼオラ、あんたもそう思うでしょ!?？」

「思います！ だから、確かめに行きたいの！ 直接会って、話を……！」

「リリ。これ見て。新しいメッセージが来てる」

いつのまにか起きていたアリカンテがぼさぼさの頭を掻きながら自分のスクロールを見せてきた。

メッセージの表示。

エイズル・ヌウ先生からの。

「これ……！」

その場にいた全員が慌てて自分のスクロールを確認した。

その内容に、チーム《ZBLA》の面々の表情は凍りついていった。

・今朝の報道にもあったように、アカデミー職員に対する悪質な暴力行為の科により、我がアカデミー所属のチーム《XUXA》は解散および退学処分とする。

・また、学内より既に逃亡していることが確認できたため、ミストラル全域に指名手

配。



・ミストラルのプロハンターネットワークに追跡および捕縛の任務が出されている。  
 ・チーム《ZBLA》にも、エイズル・ヌウからの直接の指示として、チーム《XU  
 XA》の追跡を命じる。

画面を凝視したままのゼオラの肩に、ベジヨータはそつと手を置く。触れたその肩は震えていた。

「お嬢……流石にこの任務は、お嬢には——」

「ううん、ありがとう、ベジヨータ。でも、私もあの人たちを追いたい。直接会って、確かめたいの。何があったか。みんなを巻き込んでしまふけれど、私は行きたい」

「……ゼオラ、少し強くなったね。あたしはもちろん、着いて行くよ。ゼオラがリーダーだもん」

「オレも。リリを危ない目に合わせたく、ない」

チームを組んで一週間足らずではあるが、この時《ZBLA》は初めて同じ目的に向かつて行動することになった。

彼らは程なく思い知ることになる。

たった4人とはいえ、チームを維持することの困難さと、

チームという繋がり脆弱さを。

「……行きましょう」

ゼオラが、弱々しく笑った。

※※※

物々しく武装した集団が通り過ぎるのが、路地から見える。プロハンターのチームだろうか。

「……行つたな」

「見つかるかと思つた……。ねえ、ユナカイト。僕ら全員ずーっと《偽装》しとくとか、できないの?」

「俺のオーラが無尽蔵ならとつくにやつてる。そう上手くいくか、馬鹿野郎」

「星火くん、あんたのマント頂戴。これ以上ここにじつとしてたら、肌に傷がつく」

ゴミだらけの路地裏で、チーム《XUXA》は息を潜めていた。

「これからどうするんだい、リーダー。僕たちミストラル中のお尋ね者になっちゃつたよ。ああ、全国区で有名になるなら、奇術で有名になりたかつたなあ……」

「うるせーよ、おチビ。どうするもこうするもねーだろ」

「ああ、やることは決まってる」

「え？ なに、どうするの」

ゴミ溜めで、キセラは立ち上がる。

その勢いで、近くにあった生ゴミなどがばらばらと散った。

アマレットが露骨に嫌そうな顔をして、星火のマントを引っ張って身体を拭く。

「ちよつと、きつたない！ 何すんの、キセラ」

「ぎやはは、悪い。そーだな、きたねえよなあ」

でも、そんなのは慣れっこだ。

ずっと昔から、汚いのも、苦しいのも。

馬の死体に挟まれてたころよりは、だいぶマシだ。

見上げると、建物の間から、狭い青空が見える。

壁と壁に挟まれて、一本の細い線のような青空。

キセラはそれを、指でなぞった。

「……まあ、これしかねえよな」

「何やってんの？ キセラ」

「うっせーぞ星火。考え事してたんだよ。あたしは賢いからな」

「キセラ。お前の考えそうなことは大体わかるーが、話せよ。決めたんだろ？」

ユナカイトを一瞥し、にやりと笑う。  
そうだ。これしかない。

「ああ、決めたぜ。おめーら、分かっているとと思うが、状況は最悪だ。連中に見つかりやあ、まあ、怪我じゃすまねーだろう。だからよ、あたしらも連中をタダだすまさねえ」

「……え？」

「決まってるんだろ。やり返す。ぶつ殺す。あたしらをナメたこと、死ぬほど後悔させてやる」

少しの沈黙。

しかし、それはすぐに、少しずつ崩れていった。

笑い声で。

「ぶっ……くっくっ……ははははははっ」

星火が堪えきれず笑い出した。

アマレットも口を覆って肩を震わせる。

ユナカイトは目を閉じ、にやりと口の端を歪めている。

「あー笑った。でもキセラ、どうするの？ 具体的には」

「馬鹿かよお前は。あたしらチーム《X U X A》、まだできて間もねえけどよ、やりかたは決まってるじゃねえか」

少しだけ不思議そうな顔をしていた星火は、すぐに得心がいった顔をする。

「……そうだね。決まった。——いや、《決まってない》って、決まった」

「ひよつとしてアレ？ めいめいテキトーに仕掛けて」

「そうだ。どつかのバカがエラーを吐いたら」

「テキトーにフォローする、だね」

にやりと、キセラが嗤う。

「ああ、そうだ。だから、あたしらは一旦ここでバラバラになる。逃げも隠れもする。ただし、その後でかならず仕掛ける。連中をぶつ殺すためにな」

「了解だ、リーダー。まあ、こんな目立つ見た目の奴らが固まってるだけでやりづらいからな」

「まあ、そうするしかないでしょうね。でも、星火くんはわたしと来ること」

「え！ いいの、アマレット……？」

「身の周りのめんどくさいことやってくれる人がいないとストレスだからね」

「使用人かよ……」

それぞれ、いつのまにか立ち上がっていた。

それぞれ、違う方向を向きながらも。

「また集まるタイミングも、決めねえ。それぞれが連中をぶつ殺す算段をつけたら、テキトーにそれぞれで仕掛ける。それで十分だ。ただしー」

四人の視線は、交わらない。

「死ぬなよ。お前らのことはーそこそこ気に入ってる」

同時に歩き出す。

しかし、別々の方向に歩き出したから、お互いに見えなかった。

チーム《X U X A》四人ともが、笑っていたことを。

不敵で、邪悪で、けだものじみた笑顔で。

嘘つき。

ペテン師。

奇術師。

詐欺師。

そんな四人からなる、当代随一の問題児チーム（XUXA（シューシャ））。

それは、瞬間的に最も有名になり、そしてハイヴン・アカデミー史上――

最も早く解散したチームの名前である。